K250.62

1

1d

文部省著作教科書

中学商業

1

K250.62
1
1d
d

100

中学商業

1

目　　録

まえがき……1

1. われわれの生活と経済……3

1. 生活に必要なもの……3
2. どうしてものを手に入れるか……4
3. 働くこと……5
4. 経済ということ……7
5. ものの値段のこと……9

2. ものを作るには（生産）……12

1. ものを作る仕事（産業）……12
2. 財　貨（もの）……16
3. 生産にはどんなものが必要か……17
4. 生産事業の経営……24

3. ものが手にはいるまで（配給）……28

1. 配給とはどんなことか……28
2. 商業のはじまりとその発達……30
3. 配給のしくみ……33
4. いろいろの商店……36
5. 商店の経営……42
6. 配給の統制……50
7. 外國貿易……52
8. 商港及び税関……57
9. 商工会議所と産業興信所……58
10. スクールストア……59

4. ものを運ぶには（交通及び通信）……67

いろいろの交通……67

1. 陸上の交通……68

2. 海上の交通……77
3. 小運送……80
4. 倉庫……82
いろいろの通信……84
1. 郵便……85
2. 小包郵便……88
3. 電信……88
4. 電話……90
5. 新聞とラジオ……92

まえがき

昔，文化がまだ現代のように開けなかった時代には，人々は自分の必要とするものを自分で作って使っていたが，やがて，少しく文化が進んだ時代には，自分で作ったものと，他人の作ったものとを交換して使っていた。これが，物々交換時代といって，いろいろの点で不便なものであった。

○物々交換の不便は，どんなであるかを考えてみよう。

現在では，生産者はどこで，だれが，いつ使うかわからないものを作っているし，また消費者はどこで，だれによって，いつ製造されたかを知らないでものを使っている。この間の連絡をつける仕事が商業であり，それを行う人が商人である。すなわち，商業は生産者と消費者とを連絡する仲介業である。

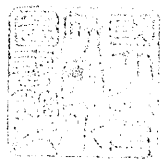
したがって商人は，いつ，どこで，どんな商品が，だれによって，どのくらい作られるか，また，それがいつ，どこで，だれによって，どのくらい使われるか，それをどうして運搬し，配給するかといったような，商業経済に関する，深く廣い知識をもたなければならない。それと同時に，商業が社会経済の必要から起った職業であり，商人は，社会人であるから，世の中の人々が，それによって，よき生活を豊かに営めるように，してやらなければならないのであって，商人は自分一個の利益ばかり追求することなく，良心的に行動しなければならない。

商業を学習するに当たっては，商業に従事する者はいうまでもなく，他の職業に従事するものでも，世の中の一般経済並び

に商業現象を認識して，社会生活・経済生活を豊かにし，進んでこれを向上発展させ，また，各種の産業並びに経済生活に関する事務を，科学的・能率的に処理できるような能力を，かん養することが必要である。そのためには，経済生活・商業活動に必要な知識・技能を習得し，商業の実践的活動を通じて，勤労の尊重すべきことを体得し，社会人としての商業道徳に徹し，社会の福祉に貢献し，これを向上発展させるよう工夫・努力しなければならない。

○配給について，商業と他の産業との関係を考えてみよう。

○町や村にある古い商店について，商売を始めたわけを尋ね，商業の起源について考えてみよう。

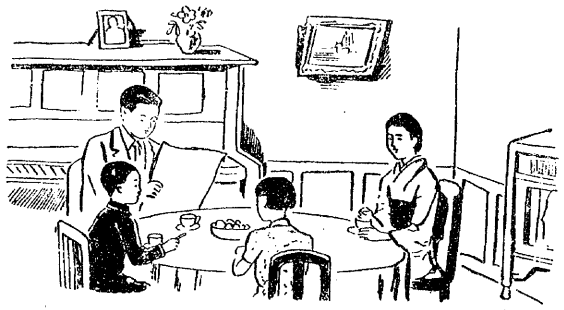


1. われわれの生活と経済

1. 生活に必要なもの

われわれが毎日暮らして行くためには，いろいろのものが必要である。どんなものが必要であるかを考えてみよう。

まず，空氣や水などは生きるために，せひなくてはならないものであるが，住む家，たべるもの，着るものなども，毎日暮らして行くために，最も必要なものである。また，炭・薪などの燃料や，電燈や電熱器などもなくてはならないし，あるいは勉強するためには，書物・学用品などが必要である。さらに，



世の中の出來事を知るためには，新聞やラジオも欠くことのできないものである。その他，考えてみると，われわれが暮らしのために必要とするものは，まだまだたくさんある。

すなわち，われわれは遠いところへでかけるには，汽車や電車などの乗物を利用したり，また手紙を出したり，おかねを預けたり，借りたりするには，郵便局や銀行などを利用する。そ

の他，映画館に行ったり，宿屋に泊まるなど，われわれはその時々の必要によって，いろいろなものを利用している。

ものをたべたり，使ったりすることを消費というが，われわれが消費したり，利用したりする多くのものは，いずれも，われわれが生命を保ち，活動する力を養い，また，りっぱな人となって，ほかの人と共に活動し，世の中を進歩・発展させるために，せひなくてはならないたいせつなものである。

2. どうしてものを手に入れるか

ところで，われわれは自分の必要なものを，どうして手に入れたり，あるいは利用したりしているのであろうか。われわれの生活に必要なものの中には，われわれがそれを自分で作って間に合わすことのできるものもある。しかし，すべてのものを全部自分で作ることはとうていできない。われわれは生活に必要な大部分のものを，ほかの人が作ったものから分けてもらって，消費したり，あるいは利用したりしているのである。その場合，われわれはものとものとをとりかえて，自分の必要なものを手に入れることもあるが，たいていの場合は，おかねをはらって，ものを手に入れ，あるいは利用している。

このように，われわれの毎日の暮らしには，いろいろのものが必要であり，また，それを手に入れたり，利用したりするためには，おかねがなくてはならない。

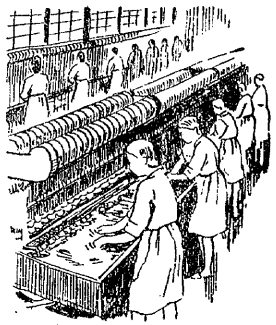
○どんな場合に，物々交換によって必要なものを手に入れているか，またそれはなぜかを考えてみよう。

○おかねを使って必要なものを手に入れることは，なぜ便利かを調べてみよう。

それでは，このものと，それからものを買うためにいるおかねとを，どうしてわれわれは手に入れることができるのであろうか。そのためには，われわれは働かなくてはならない。

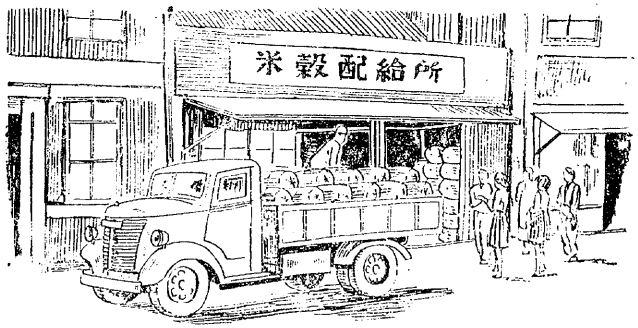
3. 働くこと

まず，ものについて考えてみよう。われわれが必要とするものの中には，空気や水のように，自然にあるもので，われわれがいつでも，ほしいだけ使えるものもある。しかし，われわれが生活のために必要とするものは非常に多いから，自然にあるままのものだけでは，その種類も数量もたりな



いし，また，そのまますぐに使えないものもある。したがって，自分の必要なものを手に入れるには，われわれは，まず，自然にあるものをとり，あるいは，自然の力を利用し，道具や機械を使い，ささざさに工夫・努力し，働いてものを作り出さなくてはならない。こうして，ものを作ることが生産である。このように，われわれは消費や利用のために必要なものを手に入れるには，まず，それをわれわれが働いて生産しなくてはならない。ここに，働くことのたいせつさがある。

次に，こうしてわれわれの必要なものを生産するのは，工場や農家などである。しかし，方々の工場や農家などで生産するものは，ところによって，その種類が違い，また，生産するものの数量や，その時期も違うことが多い。したがって，生産したものを消費に役立たせるためには，それを方々から集めたり，



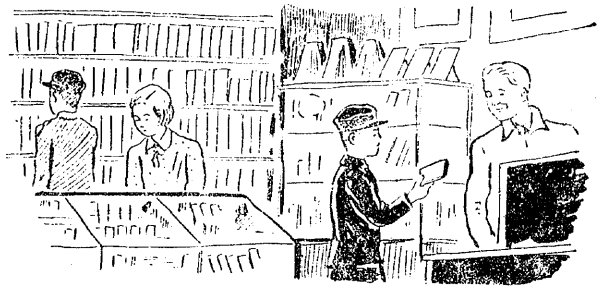
あるいは方々へ運んだりして，必要なものを，必要なときに，必要なところへ，廣く行きわたらせることがたいせつである。これが配給ということであり，われわれはこの配給によって，

必要なものを手に入れることができるのである。

さて，こうして生産され，配給されるものを，手に入れて消費するにも，あるいは利用するにも，おかねがなければならない。それでは，このおかねはどうしてわれわれの手にはいるのであろうか。それは，いうまでもなく，われわれが働いて手に入れたものである。たとえば，われわれは生産のために働き，あるいは，配給のために働き，その他，人のため，世の中のために働いて，その代償としておかねを受けとっている。このように，われわれは毎日の暮らしに必要なものとおかねとを，いずれも働くことによって，手に入れることができるのである。

自然にあるものや自然の力を利用して，いろいろなものを生産し，また，そのために道具や機械を使い，さらに，おかねを使って，もののやりとりをするなど，こうしたことが人の暮らし方と，動物の暮らし方との違うところである。

4. 経済ということ



さて，こうして手に入れたものとおかねとを，われわれは

んなふうに使っているであろうか。

まず，われわれはものとおかねとを，いつでも反対に使っている。一般に，ものを手に入れようとすれば，おかねを出さなくてはならないし，おかねを手に入れるには，何かものを出すか，または，働かなくてはならない。

こうして，われわれが手に入れたものやおかねを使う場合には，できるだけそれらをむだに使わないように心がけなければならない。たとえば，あるものを生産する場合には，できるだけ少ない原料や，短い時間で，できるだけ多くのよいものを作るように工夫する。よく，「ものを経済に使え」とか，「時間の経済を考えよ」とかいわれるように，こうした心がけは，ものを消費する場合にも，おかねを使う場合にも，さらにわれわれが勉強をする場合にも，いつでもたいせつなことである。

われわれが毎日ものやおかねを消費したり，利用したりして，暮らしを続けて行くためには，生産や配給が，常にくり返して行われることが必要である。したがって，われわれはこのために正しい順序と便利なしくみを考え，生産や配給がつごうよく行われ，ものやおかねを，有効に使うことができるようにすることがたいせつである。こうして，正しい順序と便利なしくみで，生産や配給や消費を行うことが経済ということである。われわれは，米が不足な時には，なるべく酒を作ることを少なくして，たべる方にまわした。それは，米でたべる方が酒にして飲むよりも，米のねうちがずっと多いからである。このように，何にでも使えるものは，われわれが一番ねうちがあると考える

ことに使うようにすること，これが経済の最もたいせつな点である。

5. ものの値段のこと

「ねこに小判」などというように，もののねうちはそれを使う人によって違うことが少なくない。したがって，ものやおかねの使い方は，人によってさまざまである。けれども，普通，もののねうちは，おかねによって値段としてあらわされている。そこで，われわれはものやおかねを使う時には，たいてい，ものの値段と使ったときの効果によって，その使い方をきめている。この場合，われわれの暮らしには衣・食・住が最もたいせつであるから，だれでもこのために，まず必要なものやおかねを使っている。しかし，われわれはただ，ものを飲んだり，たべたり，あるいは働いて寝るだけでは満足できるものではない。どんな人でも，絶えず自分を向上させようとする氣持を持っている。それ故，われわれがりっぱな人となって，世の中の役に立つようになるには，学問を修め，德を養い，あるいは藝術に励むなどいろいろ勉強することが必要である。このためにも，われわれはまた，ものやおかねを使うのである。さらに，われわれは大勢の人と共に國家を作り，一つの政府のもとで暮らしている。この場合には，政府が学校をたてたり，警察や裁判所を設け，道路や橋を造るなど，國民のためになる仕事をして政治を行うが，このためにも，多くのものやおかねが必要である。

われわれは，いろいろの方面にものやおかねを使っており，

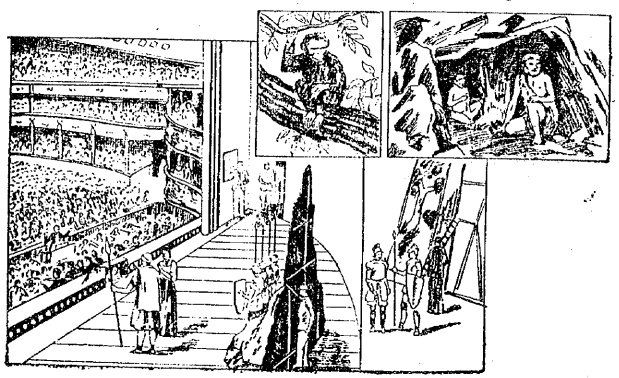
また，その使い方もさまざまである。このように，ものやおかねを使って暮らすことを経済生活というが，この経済生活のなかでは，働いてものを生産すること，また，働いておかねを手に入れることが，最もたいせつなことである。これが充実してはじめて，われわれの暮らしのほかの方面，たとえば，学問を修め，藝術に励むなどの文化生活も，あるいは，國家をつくって多くの人々が，共に幸福に生活する政治も，発展することができるのである。

さて，現在，われわれはものを手に入れるにも，おかねを使うにも，あるいは乗物を利用するにも，自分の自由にならないことが多い。また，すべてのものの値段が非常にあがっている。これはなぜであろうか。それはわが國が敗戰の結果，國全体としてものを生産する力が非常に小さくなってしまったのに，おかねが世の中にたくさん出ているからである。そこで，少ししか生産できないものを，全部の人が公平に使うようにするために，消費の割り当てを行って配給することが必要になる。また，ものが少ないのにおかねを自由に使わせると，ものの値段があがって多くの人が困るようになる。したがって，ものの値段を統制したり，あるいはおかねを自由に使わせないようにすることも必要である。こうして，政府がいろいろの統制を行うのであるが，しかし，統制が必要なのは，結局生産するものが不足していることがその根本原因である。したがってわれわれは，まず，一生懸命働いて少しでも多くのものを生産することが必要であり，また，將來再び戰爭を起さないような，平和な國家

をつくることに努力し，わが國のたりないものを輸入できるようにすることがたいせつでなのある。

われわれの暮らしと同様，國全体の場合でも，やはり経済がその基礎になるのであるから，われわれはこれについて，正しい考えと知識を持つように学ぶことが必要である。

- ○ われわれが毎日使うものを，その使い道によって分けてみよう。
- ○ 家計簿を見て，毎月どんなことにおかねを使っているかを調べてみよう。
- ○ 人の暮らし方と動物の暮らし方とでは，どんなところが違っているかを考えてみよう。
- ○ 戰前と戰後で，ものの値段はどんなに違っているかを調べてみよう。
- ○ わが國経済を再建して，われわれの経済生活を，豊かにするためには，どうしたらよいかを考えてみよう。



2. ものを作るには（生産）

○ものをつくるということは，どういうことかを考えよう。

○米をつくるのと米をたくのとは，どう違うかを考えよう。

われわれが毎日暮らして行くためには，たくさんなものが必要である。そのためには，いろいろなものを生産しなくてはならない。それでは，ものを作るにはどうしたらよいか。次にこのことを考えてみよう。

1. ものをつくる仕事（産業）

○毎日たべている米はどうして作られるかを調べてみよう。

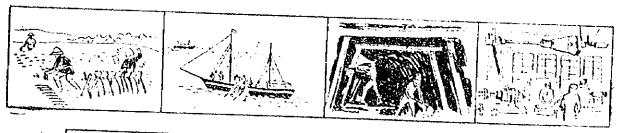
○自分の家について，どんな材料が使われ，どんな人の労働が用いられたかを考えてみよう。

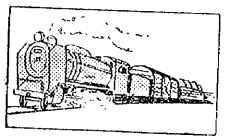
○着物はどうして作られるかを調べてみよう。

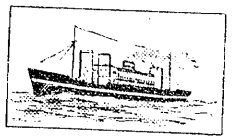
われわれは必要なものを生産するために，自然にあるものや，または自然の力を利用し，道具や機械を使って，働かなくてはならない。また，われわれの必要なものはその種類が多いから，これらのものを作る場合には，多勢の人が手分けをして仕事をする方が便利である。こうして，世の中全体の必要なものを生産するのが，各種の産業である。

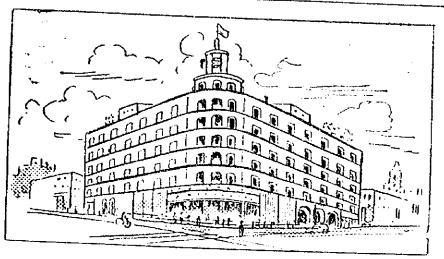
たとえば，農業や牧畜業・水産業などは，たべものや着物の原料などを生産し，林業は木材や炭などを生産し，鉱業は石炭や石油などの有用な鉱物を生産する。また，工業はこれらの産業で生産したものを原料とし，これに手を加え，われわれが消

費し，利用するのにつごうのよいものを製造する。さらに，工業は家をたて，道路や橋をこしらえ，道具や機械を作り，肥料を製造するなど，人類の生活に必要なものばかりでなく，ほかの産業に必要なものをも生産する。









農業や工業などで生産したものを買い集め，それを必要なところへ配給するのは商業である。なお，商業はものを運んだり，すぐにいらないものをしまっておいたりして，生産されたものがむだにならないよう，できるだけそれを役に立て，もののねうちが多くなるように工夫する。したがって，廣い意味では商業も一つの生産の仕事をするわけである。

こうして，各種の産業でいろいろな生産が行われるが，また，これらの産業はそれぞれ，おたがいに助けあって生産を行って

いるものである。このことを，鉄の生産について調べてみよう。

現代は「鉄文明の時代」ともいわれるように，われわれは多くのものに鉄を利用している。この鉄はどうして生産されるか。また，鉄の生産にはどんな産業が，どんな関係を持っているだろうか。

まず，鉄を生産するには，その原料として鉄鉱石や石炭などが必要であるが，これを生産するのは鉱業である。次に，原料をよう鉱炉でとかして，鉄をつくるのは製鉄工業である。よう鉱炉ではじめにつくられるのは，せん鉄というもろい性質の鉄であるから，これにニッケル・マンガン・クロームなどをませて，丈夫な鋼鉄をつくることが多い。この仕事もやはり製鉄工業で行われる。さらに，よう鉱炉を築くには，耐火れんがが必要であるが，これを製造するのは窯業である。

さて，こうして生産された鋼鉄を材料にして，道具や機械をつくるのは機械工業である。さらに，これらの機械を使って，織物や肥料を生産するのは紡織工業や化学工業である。

また，こうした鉱業や工業などに働く人々の，たべものをつくったり，また，織物の原料をつくったりするのは，農業・水産業・牧畜業などであり，家屋の建築や工場・鉱山に必要な木材その他を生産するのは林業である。

このように，鉄の生産にはほかの産業で生産されたものが必要であると同時に，また，ほかの産業は鉄の生産がなければ，その生産を十分に行うことができないのである。たとえば，製鉄に一番必要な石炭は，鉄を材料とした道具や資材がなければ

生産ができないし，また，農業には，鉄によってつくられたかまや，そのほかのいろいろな道具や機械が必要である。そのほか，衣料や肥料もなくてはならない。したがって，一つの産業だけではものの生産が完全に行われないから，それを完全にするためには，工業と鉱業，農林業と工業や鉱業などを結びつけ，それぞれの産業の生産物が，必要なところへあまねく行きわたるようにすることがたいせつである。このように，多くの産業はおたがいに助けあって，その生産を行うことができるのであり，また，この配給を受け持つのが商業の働きであり，それをなめらかに運行させるのが商業のつとめである。

○石炭の生産は，ほかの産業にどんな関係があるかを調べてみよう。

○わが國の産業には，それぞれ，どんな特徴があるかを調べてみよう。

○わが國にはどんな産業があるか，また，それぞれの産業に，どのくらいの人が働いているかを調べてみよう。

○各種物資の生産状況を調べてみよう。

○わが國では，今どんなものを，最も多く生産したらよいかを考えてみよう。

○わが國の各産業を発展させるために，政府はそれぞれどんな計画をたてているかを調べてみよう。

○工業生産において，原料がわが國で十分間に合うものと，輸入に仰がなければ間に合わないものとを調べてみよう。

2. 財貨（もの）

われわれが毎日使っているものは，財貨ともいわれるが，財貨には多くの種類があり，それぞれ大きさも色も形も性質もみな違っている。

このうち，たべるものや着るものなどのように，毎日の暮らしのために消費するものを，消費財といっている。また，この中にはたべものや燃料のように，一度しか使えないものと，着物や道具のように，長い間くり返して使えるものとがある。

消費財のうちには米や魚のように，おもに自然の力によって生産されるものもあるが，なかにはそれを生産するために，他の原料が必要であるものが少なくない。いま，このことを書物について考えてみよう。

書物は，紙でできているが，その紙を作るにはパルプが必要であり，パルプは木材から作られる。また，書物には字や絵などが印刷してあるが，これには活字やインクなどが必要である。さらに，木材からパルプを，パルプから紙を作り，べつに，活字やインクを作って印刷をするには，なお，ほかの多くの原料や材料，道具や機械などが使われる。また，印刷した紙をそろえて，表紙をつけ，製本するにも，その材料や道具が必要である。このように，書物を作るには多くのものが必要であるが，このことは，また書物以外のものについても同様である。

そこで，われわれが財貨を生産する場合には，直接消費のために使うものを生産すると共に，これを生産するのに必要な，原料や道具　機械などの生産財をも生産しなくてはならないの

である。

なお，同じものでも，たとえば石炭のように，われわれが家庭で消費する場合には消費財であるが，これを工場で生産のために使う場合には生産財となるものがある。

○鉛筆を生産するにはどんなものが必要かを調べてみよう。

3. 生産にはどんなものが必要か

○米ができるまでに，どんなものが，どういう関係をもつかを調べてみよう。

○綿製衣料ができるまでに，どんなものが，どういう関係をもつかを調べてみよう。

以上のように，多くの財貨は，それぞれの産業で生産されるが，その生産の方法は財貨によって同じではない。しかし，どんな財貨でも，それを生産する場合には，必ずなくてはならないものがある。それはどんなものであるか。次に調べてみよう。

(1) 自然（土地）

○すでに学んだ理科の知識と関連して，えんどう をまいて，その成長を観察し，自然と生産との関係を考えてみよう。

まず，どんなものでも，それを作るには，その原料が必要である。生産の原料として使われるものには，石炭や鉄鉱石などのように自然にある資源と，綿花や木材のように，われわれが自然を利用して，農業その他の産業で生産したものとがある。しかし，いずれの場合でも考えてみると，われわれが生産に利用する原料は，すべて自然の恵みによるものである。

自然の中でも，特に，われわれにたいせつなものは土地である。土地は，われわれにいろいろの資源と，ものを生産する力と，またわれわれが暮らす場所とを與えてくれる。ただし，土地には場所によって氣候や地形に違った特徴があり，また，地下の資源もその種類や量が異なることが多い。したがって，われわれが，資源や自然の力を利用して生産を行うといっても，その方法は場所によって同じではない。たとえば，廣く平らで，日光がよくあたり，水の便利のよいところは農業に適しており，また，石炭や鉄鉱石などの有用な鉱物があり，しかも，交通の便利のよいところは工業に適している。

次に，土地や資源には限りがあるから，われわれが必要なものを生産する場合には，できるだけ有効に土地や資源，または自然の力を利用し，できるだけ多くのよいものを生産するようにしなくてはならないのである。いっそう多くの米を生産するためには，新しく，土地をきりひらき，田をつくり，水の便利をよくし，あるいは稻の品種を改良し，よい肥料を十分に施すなど，いろいろのくふうと努力が必要である。また，資源のたりないものは，ほかのものを代わりに利用することも考えなくてはならない。最近は，科学の発達によって多くの発明や発見が行われ，資源や自然の力を利用したり，または自然のものに代わるよいものが，極めて多く生産されるようになっている。

○自然の力は，生産のために，どんなふうに利用されているかを調べてみよう。

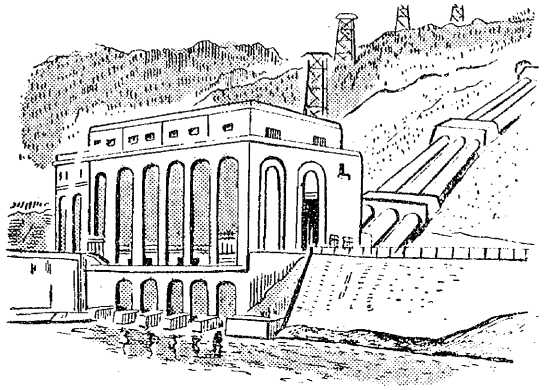
○自然のものよりも優れた品質をもった発明品に，どんなものがあるかを調べてみよう。

○わが國にあるおもな地下資源について，産地・年産額を調べてみよう。

○わが國農産物の生産狀況を調べてみよう。

○生産に関係する自然にはどんなものがあって，どんな作用をするかを考えてみよう。

○土地の生産力はどこでも同じかどうかを調べてみよう。



水力発電所

(2) 人の働き（労働）

○理科の学習と関連して，人力・畜力そのほかの動力の効率を調べてみよう。

自然の力や資源を利用してものを生産するには，われわれは働かなくてはならない。生産のために人が働くことを，一般に労働というが，これから，その労働について考えてみよう。

われわれが何か仕事をする場合は，おもに頭を使って仕事を

する精神労働と，おもにからだを使って働く筋肉労働とがある。

○遠足　野球・体操などと労働はどう違うかを考えてみよう。

さらに，われわれが仕事をする場合には，それがひとりでもできる場合と，ほかの人の助けをかりなくてはできない場合とがある。また，ひとりでできる仕事でも，人の助けをかりれば，早く，らくに仕上げることができる。能率をあげて仕事をすることは，どんな場合にもたいせつなことであるが，特に，生産のための仕事をする場合には，このことが必要である。生産のために，能率をあげて仕事をするには，まず，仕事をする人の素質や能力が，その仕事に，うまく合っているかどうかをよく調べ，また，仕事をする時間やその働き方，あるいは，仕事に必要な道具や機械などのことも考えなくてはならない。

○力を合わせなければできない仕事と，手分けしてできる仕事を考えてみよう。

大勢の人がいっしょに仕事をする場合には，仕事全体の能率があがるように，それぞれの人が働くしくみを考えることが必要である。重いものを運ぶ時のように，大勢の人が集まって，一つの仕事を協力してやることが協業のしくみであり，また，家をたてる時のように，ひとりでもできないことはないが，大勢の人が集まり，それぞれ自分の専門の仕事をしながら，全体の人が力を合わせて，一つの仕事を仕上げることが分業のしくみである。

協業や分業のしくみによって，大勢の人がいっしょに働く場合は，人の力や仕事の時間が節約でき，また，それぞれの人が

自分の仕事に早くなれるから，非常に全体の能率があがる。したがって，このしくみを生産の場合に應用すると，生産されるものの数が極めて多くなる。これをピンを製造する場合について考えてみるに，その仕事をひとりでやると，1日に1本のピンを作ることさえむずかしい。ところが，その仕事を 10 のこまかい仕事に分け，10人の人がそれぞれ手分けをして仕事をすると，1日に48,000本，1人当たり4,800本のピンを製造することができるといわれている。

○分業でマッチを作る過程を，何段階に分けたらよいかを考えてみよう。

○わが國の産業中，分業で能率をあげている実例を調べてみよう。

このように，協業や分業によって仕事をする場合には多くの利益があるので，今日，たいていの仕事には，このしくみが利用されている。農家や工場などで生産を行う場合はもちろん，農業や工業そのほかの産業が，それぞれ職業的に手分けをして自分の専門にしたがい，世の中に必要なものを生産する場合にも，さらに廣く，世の中全体の人が，自分の専門の仕事について働く場合にも，やはり，こうしたしくみが利用されている。

○「働かない者はたべるな」とはどんなことか。

○生産のための労働と家事のための働きとは，どこが違うかを考えてみよう。

○分業とはどういうことか，実例をあげて考えてみよう。

○労働の能率に関連する要素について調べてみよう。

○ものの生産に労働のたいせつなことを考えてみよう。

○工業労働と農業労働とを比較してみよう。

(3) 道具や機械はなぜ必要か

○道具や機械が，ものをつくる場合に，使われるようになった理由を考えてみよう。

われわれが仕事をする際には，道具が必要なことはいうまでもない。たとえば，字を書くには鉛筆が必要であり，鉛筆を削るにはナイフが必要である。また，手でできる仕事も，道具を使えば早く，しかもうまくできあがる。さらに，多くのものを一度に作る時には，道具ばかりでなく，機械を使えば，人の手がはぶけ，いっそう仕事の能率があがる。機械は道具に比べると，人の手がはぶけるばかりでなく，道具ではできないものも作ることができ，また，道具よりも早くよいものができる。したがって，機械が進歩すると，それだけものの生産も増加する。

○生糸の製造過程において，道具や機械はどんなところに使われるかを調べてみよう。

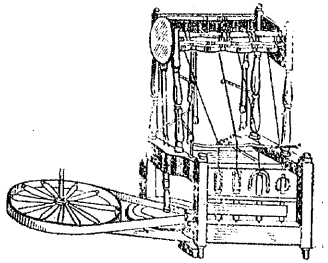
○豊田式自動織機についてその効用を調べてみよう。

道具や機械を使い，協業や分業のしくみによって仕事をすることは，今日すべてのものの生産に，廣く應用されている方法であるが，この方法によって，ものの生産が非常に発達したのである。特に，機械は多くの人が，長い間かかって，苦心に苦心を重ねて工夫・発明したものであり，十八世紀のなかごろ，イギリスではじめて，自動式の紡績機械が発明されて以來，つぎつぎに多くの機械が発明・改良され，それが生産や交通など

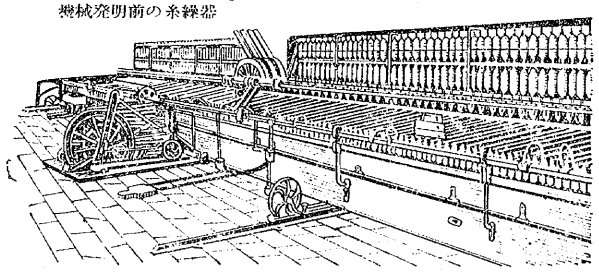
に利用されたので，われわれの生活が非常に豊かになると共に，また便利にもなったのである。現在でも，新しい機械の発明や改良が盛んに行われているので，自然の力を利用したり，あるいは新しい資源を開発・利用して，いろいろのものを生産することがますます多くなったのである。

○道具や機械が発達して來た歴史を調べてみよう。

機械発明前の糸繰器



アークライトの紡績機械



現在の紡績機械

○道具と機械の長所と短所とを比較してみよう。

○精米機はどんな発達をしたかを調べてみよう。

○計算機の発達を順序よく調べてみよう。

○自分たちの生活において道具や機械を使って，非常に労働

能率をあげたと思ったことがあるかを考えてみよう。

(4) もとで（資本）

以上のように，ものを生産するためには，原料や材料，道具や機械などが必要であり，また，それらを使って働く人が必要である。したがって，工場を作って，何かの生産をはじめる場合には，土地を買い，建物をたて，原料や機械などをととのえ，また，働く人を雇うために，まとまったおかねが必要である。さらに，生産ばかりでなく，どんな事業をはじめるにも，まず，おかねを用意しなくてはならない。このように，事業をはじめる際に用意するおかね・原料・機械・建物などのことを「もとで」（資本）というのである。

○各自家業について，その営業の種類ともとでについて考えてみよう。

○商売人のもとでは，どんな形をしているかを考えてみよう

もとでの中には，原料や燃料のように一度しか使えないものと，道具や機械・建物のように，長い間使えるものとがある。

今日では，原料も機械も，また雇い人の賃金もみな非常に高いから，事業に必要なもとでを，ひとりで出すことができないことが多い。したがって，多くの人が集まって，おたがいにもとでを出しあったり，自己資金のほかに，たりないもとでをよそから借りいれる借入資金でもとでをととのえる場合もある。

4. 生産事業の経営

われわれの家庭や農家では，自分で使うために必要なものを

自ら作ることがある。工場などは，他からの注文をうけて生産をすることも少なくない。しかし，今は，世の中全体の人々のために必要なものを生産するのであって，この場合，農家でも工場でも，きまった人のためのみに生産するのではない。農家や工場は，その生産したものを廣く世の中の人に売り，その代金で，自分の必要なものを手に入れたり，雇った人に賃金を拂ったりして，残りをさらに次の生産に利用し，できるだけ，その事業を発展させるように生産を行っている。もとでを出して事業を経営する人を資本家というが，資本家は，世の中に必要なものを生産する人に，資本を出すのがそのつとめであって，ただ，おかねをもうけることだけを考えればよいのではない。よい原料や機械を使い，働く人に適当な賃金を支拂い，できるだけ，多くのよいものを安い値段で生産して，世の中の人のためにつくすことがたいせつである。

次に，われわれは消費生活を毎日休みなく続けて行くのであるから，そのために必要なものを次々に，生産しなくてはならない。したがって，生産したものや，あるいは，それを売って得た代金は，全部一度に使ってしまうことなく，次の生産を続けるために，もとでとして必要な分を残しておかなくてはならない。たとえば，たべものがたりないからといって，その年にとり入れた米を，一粒のこらずたべてしまったとしたらどうなるか。それでは，まく種もなくなり，次の年は一粒も米を作ることができなくなるであろう。それ故，どんな不作の年でも，一定の米は必ず來年の種もみとして，残しておかなくてはなら

ないのである。昔，國じゅうが ききん で非常ななんぎをした際，種もみの俵をまくらにして，飢え死した農夫があったということである。

○生産事業を永く継続して行くためには，どんな注意が必要かを考えてみよう。

このように，生産したものや，それによって得たおかねの中から，一部分を次の生産のもとでとしてとっておくことは，生産をくり返し続けて行くために，非常にたいせつなことである。こうしたことを，くり返して，今年よりは來年，來年より次の年へと，次第に必要なものを多く生産するように工夫することが，われわれの暮らしを豊かにし，文化を発展させ，國を進歩させるために必要である。

さて，生産の事業は，それを経営する人々の自由にまかせておくと，それらの人々は，おたがいに自分の作ったものが，よく売れるように競争するようになる。この結果，よいものが安く作られるようになって買う人にはつごうがよいこともある。しかし，世の中に必要以上のものを作ったり，あるいは多くの人には必要でないものでも，おかねを多くとれるものをよけいに作るといったむだなことが多くなる。生産に必要な原料や機械などが十分ある場合には，こうした自由な方法で生産を行うこともある。しかし，原料や機械が不足であり，また，世の中の人々の必要なものが不足している場合には，こうした方法を改め，政府が生産について統制を加えることが多い。特に，世の中全体の人々に必要なものの生産についてはそうである。

政府が生産に統制を加える場合には，まず，人口をもとにして，世の中に必要なものの数量をよく調べ，一方，現在ある原料や機械・人手などで，どれくらいのものが生産できるかを調べる。この二つがよく調べられ，計算ができると，政府は一年間に，どんなものを，どれくらい生産したらよいかという生産の計画をたて，その上，その生産に必要な原料そのほかのものを統制して，一番たいせつなものの生産を行うところから，順次にこれを割り当てる。これを重点主義の生産ともいっている。現在わが國では，主要食料，肥料・石炭・鉄・銅などについて，こうした生産の方法をとっている。

なお，國によっては，世の中全体にたいせつなものを生産する事業は，政府が直接その経営を行ったり，あるいはすべてのものの生産を，全部政府が統制し計画をたてて行う國もある。

○わが國で生産できるもののおもな種類と，その年産額とを調べてみよう。

○新聞やラジオに注意して，最近の主要食糧需給計画を調べてみよう。

○最近の石炭の生産計画はどうなっているかを調べてみよう。

○すべてのものの生産を，計画によって行う國はどこかを調べてみよう。

○たいせつな生産事業を政府が経営するのはなぜかを考えてみよう。

○わが國で政府が経営する事業には，どんなものがあるかを調べてみよう。

3. ものが手にはいるまで（配給）

1. 配給とはどんなことか

○社会経済の中で，商人はどんな役目をもっているかを考えてみよう。

われわれが毎日消費したり，利用したりするものは，たいがい方々の農家や工場で生産されている。たとえば，米や野菜は農家がつくり，肥料や機械は工場で製造される。しかし，農家や工場は，自分のところで消費するために必要なものだけを生産するのではなく，廣く世の中のほかの消費者のために必要なものをも生産する。このように，ものを生産する人と，それを消費する人とが違うばかりでなく，また，都会に住む人はいなかの農家で作ったものをたべ，いなかの人は都会の工場で製造したものを使うなど，ものを生産する場所と，それを消費する場所とが違うことも少なくない。さらに，年一回しか收穫されない米を一年中たべるように，ものを生産する時期と，それを消費する時期とが，同じでないことも多い。そのほか，農家や工場で生産するものの種類や数量と，ほかの人が消費したいものの種類や数量とは，一致しないことがある。このように，生産と消費との間には，いろいろと食い違いのあることが多い。しかし，生産したものをできるだけ消費に役立てるためには，こうした生産と消費の食い違いを，なるべく少なくすることが必要である。そのためには，方々の農家や工場で生産したものを集め，これを消費者へ分けてやったり，また，方々へ必要な

ものを運んだり，あるいは，すぐにいらないものは，たくわえておいたりしなくてはならない。こうして，農家や工場などの生産者が生産したものを，廣く世の中の消費者に行きわたらせる活動が，配給ということである。

○配給にはどんな不便があるか，それを取り除くための工夫をしよう。

配給の仕事は生産者や消費者が，それぞれ自分で行うこともできないことはないが，それには多くの不便がある。そこで，消費者と生産者との間に立って，集荷・配給の仕事を，専門に行う者があれば，生産者も消費者も共に便利である。こうした者があれば，消費者がわざわざ農家や工場へ行かなくともすみ，また，生産者も一々その生産したものを，消費者に分けてやる手数がはぶけ，あるいは生産に必要な原料や機械などを，たやすく手に入れることができる。

○いろいろの商品について，生産者から消費者までの経路を調べて図解しよう。

このように，生産者と消費者との間に，いろいろとものの配給を取りつぐのは，商業の最もたいせつな働きである。しかし商業はこのほかにも，次のような働きをつとめる。

農家や工場が自由に生産を行う場合には，むだなものを生産することがあるから，その場合には，どんなものを作ったらよいかを知らせ，また，消費者に新しく生産されるものを知らせるなど，生産や消費の指導を行うことも商業の一つの働きである。さらに，現在は，あまり行われていないが，値段の安いと

ころで品物を買い，それを高いところで売るなどして，ものの値段を調節することも，商業のたいせつな働きの一つである。

○配給はなぜわれわれの生活にたいせつか，そのわけを考えてみよう。

○わが國現在の経済状態において，配給を自由にまかせたらどうなるかを考えてみよう。

○商人はどんな心がけがたいせつかを考えてみよう。

2. 商業のはじまりとその発達

○大昔，自分の必要なものを自分で作った時代，商業があったかどうかを調べてみよう。

以上のように，商業はいろいろの働きをつとめるが，それでは，商業はどうしてはじまり，また，どんなふうに発達して來たか。次に，その歴史を調べてみよう。

大昔の人は，魚や貝，あるいは木の実などを，海や山からとって來たり，また，ごく必要なものを自分で作って生活していた。したがって，この時代には，生産者と消費者とが同じ人であったから，配給ということは，その必要がなかったわけである。それで，この時代のことを自給自足の時代とよんでいる。

○今の日本経済では物々交換が行われているが，なぜだろうかを考えてみよう。

○馬と米と交換したい人は，どんな不便があるかを考えてみよう。

ところが，次第に世の中の人の数がふえ，また，人々の知識

が進んで，生活程度が高くなって來ると，人々はおたがいに自分のとったものや，作ったものだけでは満足しなくなり，自分のものと，他人の作ったものやとったものと，とりかえるようになる。これが物々交換の時代である。物々交換をする人が多くなり，また，その回数も重なって來ると，それは次第に規則正しく行われるようになる。さらに後になると，いつも同じ場所で物々交換を行うようになった。この場所が市(いち)である。

○四日市・五日市・八日市・十日市町などという名まえがあるが，どういうわけかを考えてみよう。

しかし，やがて物々交換には，いろいろな不便な点のあることがわかって來た。たとえば，自分が交換したいと思っても，相手がそれを承知しなかったり，あるいは交換するものや，その分量のことなどで，おたがいに意見の合わないことも多い。そこで，物々交換には，だれでも喜んで受け取るもの，また，交換の計算がはっきりわかるものを，交換の際に使うことが便利である。こうして，考え出されたものがおかね(貨幣)である。

○なぜ貝や米が交換のなかだちに使われたかを考えてみよう。

○現在，たばこが交換の媒介物となっているが，どういうわけかを考えてみよう。

貨幣を交換の道具に使うようになると，ものを手に入れることがたやすくなるから，交換の回数も多くなり，交換する人の数もふえ，また，交換の範囲が廣くなって來る。そのために，人々は自分の必要とするものを全部自分で作らず，自分で作った方がつごうのよいものだけにし，あとは貨幣との交換によっ

て他人の作ったものを手に入れるようになる。こうして次第に，自分の専門のものだけを作ったり，あるいは専門の仕事だけを行う分業が，はじまったのである。

○職業の分業のほかに，どのような分業が考えられるか。

しかし，分業がさらにこまかくなり，また，交換の範囲が廣くなって來ると，生産者はその生産したものを，自分で消費者と交換することがだんだん不便になる。そこで，方々で生産したものを買い集め，それを消費者に売り渡すことを專門にする者があらわれるようになった。これが商業のはじまりである。

○日用品交換会の実際について，調べてみよう。

商業は，最初生産者から直接消費者へ，必要なものを配給する仕事をしていた。ところが，生産の方法が進歩し，一時に，たくさんのものが生産されたり，あるいは多くの種類のものが，いろいろの時期に方々で生産されたり，また，消費者の数がふえたりするようになると，生産者と消費者とを直接連絡することが次第にむずかしくなり，商業の仕事もこれを分けて行うことが必要になった。たとえば，生産したものを集めることだけを專門にする仕事と，集めたものを消費者へ分けてやることだけを專門の仕事とするなどがそれである。また，こうした仕事を行うためには，ものを運んだり，それをたくわえておいたりする仕事が必要であるが，のちにはこれらもそれぞれ專門の仕事となる。さらに，商業の仕事を行うためには，もとでが必要であるから，おかねの出し入れや，不足を融通する仕事を專門に取り扱うものもできた。あるいは運送の仕事，またはその途中で起る不時の損害を軽くするために，保険のしくみが考えられ，それを專門にする者も，できるようになったのである。こうして，同じ商業のなかにも，多くの專門の仕事ができ，また，これによって，商業の働きがいっそう便利になったのである。

○流行と商人との関係について考えてみよう。

○商業の細分化について考えてみよう。

また，こうして商業が発達して來ると，商業の仕事をする者の中には，他人の生産したものを配給するだけでなく，自分でも世の中に必要なものを思いついて，それを自分で生産し，配給する者も多くなって來る。

このように，商業は長い間かかって次第に発達・分化して來たのであるが，これには，生産の方法が進歩したことだけでなく，交通や通信の方法が発明され，発達したことも，非常に密接な関係があるのである。

○わが國商業の発達の歴史を調べてみよう。

○市（いち）には，どんな種類があるかを調べてみよう。

○門前市というのは，どんなものかを調べてみよう。

○商業の分化と專門化との関係はどうであろうか。

3. 配給のしくみ

○各地に万屋（よろずや）というのがあるが，どういうわけかを調べてみよう。

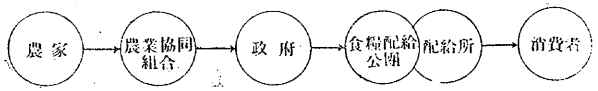
生産者から消費者へ，必要なものを配給するには，それがなめらかに行われるように，配給のしくみを考えることがたいせ

つである。配給のしくみは，配給するものの種類によって同じではないが，次に，米の配給はどんなしくみになっているかを調べてみよう。

○東京や大阪で消費される米は，どこからはいっているかを調べてみよう。

いろいろな関係で，わが國の農家には，規模の小さいものが多いから，一軒当たりの農家で作る米の量は，あまり多くない。したがって，大きな都会で大勢の人が消費する米は，方々の農家から，集めて來ることが必要である。

從來，米は各地の仲買人や産地問屋が，自由に農家から買い集め，それを都会の問屋へ運び，町の米屋が少しずつそれを仕入れて，われわれ消費者に，自由に売り渡すというしくみになっていた。しかし，現在は米の生産が不足であるため，政府がその配給に統制を加え，消費をきせいしているから，配給のしくみも次のように変わっている。



政府は，まず，毎年全國の米の收穫高を調べ，これを人口とてらし合わせ，一人当たり，一日に消費できる量をきめる。この量は米の收穫高によって違い，また，農家の人と他の消費者とでも違い，さらに，年齢によって違うなど，いろいろである。次に，この計算により，農家にはその必要な量を保有させ，それ以外の分は地方ごとに，必要な分を割り当てて供出させ，それを政府が公定價格で買い上げる。政府が買い上げた米を集めたり，運んだり，あるいはしまっておいたりして，消費者に必要な分を配給するのは，食糧配給公團である。これは從來の仲買人や米屋などが集まって作ったものであり，米の配給ばかりでなく，統制をうけているほかの主食品や，外國から輸入した食糧の配給も取り扱っている。このように，現在，米は政府によって統制され，農家で作った米は食糧配給公團によって，消費者へ配給されるしくみになっているのである。

○魚や野菜について，配給経路をあとづけてみよう。

食糧以外のものにも，それぞれの配給のしくみがあり，われわれは，直接農家や工場から，必要なものを手に入れるのではなく，配給のしくみを作っている方々のお店（商店）から，その時々の必要なものを自由に買ったり，あるいは割り当てられた配給をうけているのである。

○教科書や学用品の配給のしくみは，どうなっているかを調べてみよう。

○必要なものを配給で手に入れるのと，買い出しで手に入れるのとは，どう違うかを考えてみよう。

○配給のしくみを確実に，しかも能率よくするには，どうしたらよいかを考えてみよう。

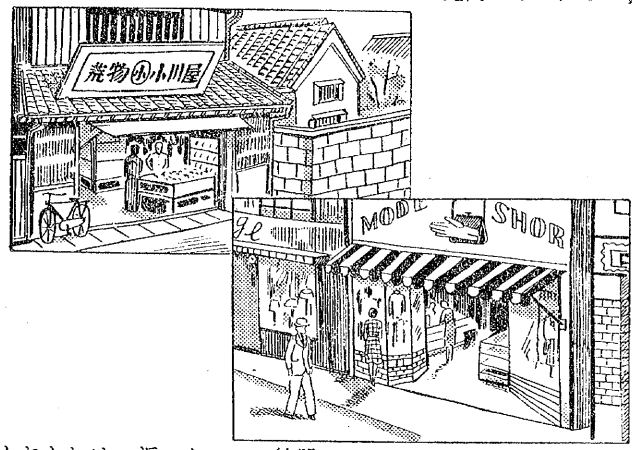
○いろいろの商品について，配給のしくみを調べて，どれが便利かを考えてみよう。

○交換に目安を置いて，経済発達の段階を考えてみよう。今はどういう段階に属すると思うか。

4. いろいろの商店

(1) 小売商

われわれが，毎日，必要な品物を買っている方々のお店は，一般に小売商とよばれている。こうした小売商があるために，



われわれは，近いところで簡単に，自分の必要なものを手に入れることができる。しかし，小売商には，次のような種類があって，その商売の仕方は同じではない。

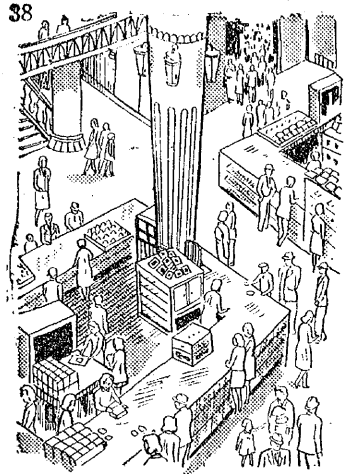
まず，小売商の中には，薬屋とか，本屋とかのように，同じ種類の品物を売るお店（単一店）が一番多いが，なかには同じ品物でも，時計・めがね・貴金属製品・小間物など，値段の高いりっぱなものだけを売るお店（専門店）がある。また，こうした商店はいくつか集まって，人どおりのにぎやかな場所へ商店街をつくることが多い。

なお，いなかへ行くと万屋といって，食料品でも，日用品でも，たいていのものを売っているところがある。

次に，きまったお店を構えないで，品物を売るのは露天商や行商である。最近，露天商は多くのものが集まって，マーケットを作ることもある。

以上のうち，単一店などは割合に少ないもとでで開業ができ，また，主人が自分の考えどおりに商売することも割合に自由であり，さらに，お客とも親しみやすい。しかし，こうした商店があまり多くなりすぎると，競争がはげしくなり，配給につごうの悪いことが多くなる。そこで，最近は多くの商店がいっしょになって組合を作って配給の仕事に協力しあうことが多い。

さて，大きな都会の中心地や，郊外電車の終点などには，りっぱな建物をもった百貨店（デパートメント・ストア）がある。百貨店も小売商の一つであるが，普通の商店と違い，洋品部・化粧品部・薬品部・家具部・食料品部など幾つかの部門に分かれ，一つの建物の中で，多くの種類の品物を売っている。百貨店では品物を自由に見て選ぶことができるので，買物をするには非常に便利である。さらに，百貨店は，店内をきれいに飾り，食堂や劇場を設け，エレベーターを利用させ，商品券を売り出したり，買物を配達するなどいろいろとお客の便宜(サービス)をはかるばかりでなく，時には展覧会そのほかの催しものをするから，多くの人が集まりやすく，品物の売れ行きもよく，したがって，その仕入れにも有利である。このように百貨店は多くの長所があるため，近年非常に発達している。しかし，百貨


百貨店の内部

店は大きいりっぱな建物や，多くの設備のために費用がかさみ，またお客と店員とが親密でないなど，その短所が少なくないのである。

また，商店の中には，幾つかの商店が共同して同じ品物を用意し，どこで買っても同じものが買えるようにしているところがある。これが連鎖店（チェーン・ストア）である。なお，このしくみは大きなもとでをもったものが，小さい商店を幾つも設けて作る場合もある。

○公設市場・日用品市場などはどうして発達したかを調べてみよう。

さらに，市場（いちば・日用品市場）といって，同じ建物の中に，幾つかの商店が集まり，それぞれの品物を売っているところがある。市場には公設のものと私設のものとがあるが，いずれも市場の中の商店は，その場所を借りて商売している。

なお，われわれが品物を買う場合には直接商店へ行かず，新聞や雑誌の廣告により，あるいは送られて來たカタログや見本などによって，注文をだして買うことがある。これが通信販売であり，遠いところに住む人には便利な方法である。

○百貨店に行って，どんな部門に分かれて営業しているかを

見よう。

○町のどこにどんな小賣商があるかを調べ，種類別に分布図を作ってみよう。

○百貨店や連鎖店は普通の小売商に比べて，どんなところに便利があるかを調べてみよう。

○連鎖店はどんな品物を扱っているかを調べてみよう。

○通信販売の長所と短所とを考えてみよう。

○標準店とはどういう店かを調べてみよう。

○小売商店を開業するには，どんなことを考えたらよいかを調べてみよう。

○生産者と消費者の間にたって，卸問屋は従來どんな役割を果して來たかを考えてみよう。

(2) 卸　商

以上のような，いろいろな小売商がわれわれに売り渡す品物は，たいていは小売商が自分で生産したものではない。それでは，小売商はどこからその品物を手に入れて來るのであろうか。

われわれ消費者が，小売商から買う品物は普通少しずつであり，また，その時期も人によって同じではない。したがって，小売商が消費者へ品物を売り渡す度ごとに，一々その生産者から直接手に入れるのでは，手数がたいへんであり，また，費用もかかる。さらに，生産者の方でも，生産する品物の数量や種類・時期などが同じではないことが多いから，多勢の小売商に始終少しずつ品物をわけてやることは，手数と費用がかかって不便である。そこで，生産者から品物を買い集め，それを小売

商・必要なだけずつ，分けてやることを専門にするものがある。これが卸商である。卸商は問屋とも呼ばれ，生産者と小売商との間に立って，品物の配給を行うのがその役目である。卸商が取り扱う品物は，小売商をお客にするのであるからまとまった数量のものが多く，普通小売りをしないことになっている。このように，卸商は小売商よりも大きく商売をするから，もとでもよけいにいるし，また，多くの品物を取り扱うから，倉庫も用意しなければならない。

○倉庫業の経営を計画してみよう。

さらに，卸商が自分で方々から，品物を買い集めることのできない場合には，卸商のために生産者から品物を集めることを専門にするものもある。これが仲買人（ブローカー）である。

以上のように，消費者と生産者との間には小売商・卸商などの商店があって，品物の配給を行っている。こうした，いろいろの商店の働きによって，はじめて，われわれ消費者の手に必要な品物が必要な時に入り，また，生産者も製品を売りさばき，その生産に必要なものを手に入れることができるのである。

こうした商店による配給のしくみは，はじめはごく簡単なものであったが，世の中が進み専門の仕事が多くなり，また，生産や消費が増加するにつれて，次第に複雑なしくみになって來た。しかし，配給のしくみが複雑となり，生産者と消費者との間に多くの仲介者がはいるようになると，配給の時間や手数がよけいにかかり，また，そのための費用もかさんで，消費者の不利益となることが多い。そこで，再び中間のものをできるだけ取り除き，配給のしくみを，なるべく簡単なものにするようになって來た。特に，品物の配給を統制する場合には，政府がこうしたことを行うことが多い。また，そのためには小売商も卸商も，共に組合を作って，統制に協力するのである。

なお，最近は方々に消費生活協同組合が作られている。これは配給のしくみが複雑となり，消費者の不利益が多くなる場合，消費者が集まって，もとでを出しあい，組合をつくって直接生産者や卸商から品物を仕入れ，小売商よりも安い値段で組合員へ配給しようとするものである。

○配給統制はなぜ行われるか。

○卸商は街のどんな所に多いかを調べてみよう。

○配給のしくみはなぜ簡単なものがよいかを考えてみよう。

○消費生活協同組合の品物の仕入先・仕入高・売上高及び品物の種類・数量などについて調べてみよう。

(3) 中央卸売市場

魚・野菜・果物などのように腐りやすいもの（生鮮食料品）は，その生産者から消費者へできるだけ早く，配給することがのぞましい。このため，東京・大阪などの大都会には中央卸売市場が設けられている。

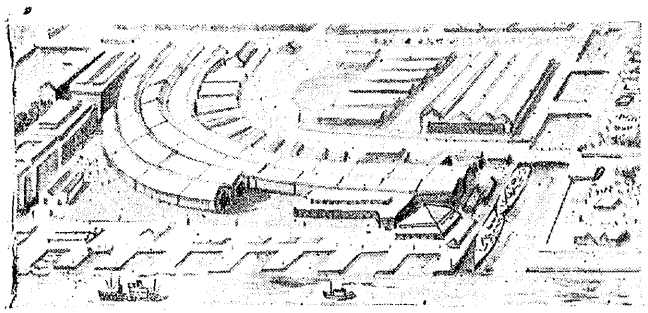
まず，産地でとれた魚・野菜・果物などは，その地の出荷協同組合に集められ，そこから都会の荷受協同組合へ送られる。荷受協同組合は卸商の組合であり，ここで集まった品物の数量により，中央そのほかの卸売市場へ配給の割り当てをする。このうち，中央卸売市場の分は，そのなかにある卸売会社が引き

受け，それを買い出しにくる小売商や，工場・料理店などの大口消費者へ売り渡すのである。現在では，品物の値段が公定されているから，卸売会社は一定の手数料をとるだけであるが，自由に品物が売買できる場合には，卸売会社は各産地から送られて來た品物をいったん自分が預り，それを買い出しに來る小売商などへせり売りによって売り渡し，利益を生産者へ渡すという方法をとっていたのである。

○生鮮食料品は，なぜこうした配給の方法によるかを考えてみよう。

○中央卸売市場で売りさばかれた品物は，どういうみちをとおって消費者に渡るかを調べてみよう。

○せり売りとはどんなことか，またなぜ，せり売りが行われるかを調べてみよう。



中央卸売市場

5. 商店の経営

○物々交換と売買とを比較してみよう。

今日，すべてのものの配給は，おかねによって品物の売り渡しをする売買という方法で行われている。これは，われわれ消費者の生活のために必要なものを，小売商から手に入れる場合でも，小売商が卸商から品物を分けてもらう場合でも，また，卸商が生産者から品物を集める場合でも，あるいはまた，生産者が必要なものをととのえる場合でも，いずれの場合でも同じである。

また，小売商と卸商とでは，その相手がそれぞれ違うから，売買の方法も同じではないことが多い。しかし，いろいろな商店が売買によって配給の仕事を営むには，次のようなことをよく知っておかなくてはならないのである。

○同じ品物の値段が店によって違うのはなぜかを考えてみよう。

(1) 商　品

○われわれが学校で使っているものには，どんな商品があるかを調べてみよう。

○学校の売店では，どんな商品を取り扱ったらよいかを考えてみよう。

小売商や卸商が配給のために売買する品物を商品と呼んでいる。商品は普通，食料品・日用品そのほか形のあるものが多いが，最近では，目に見える形のないものでも，それが売買するねうちのあるものであれば，商品として取り扱われることが少なくない。

次に，商品にはいろいろの区別があり，その種類によって，売買の方法にも違いがある。たとえば，なまの魚は天産品，そ

れを乾して作った干物を粗製品，さらに，かんずめにしたものを精製品といって区別しているが，それぞれ売買の方法には特徴がある。また，商品のうちには食料品や日用品などのように，だいたいその品質が同じであり，どこで買ってもよいもの（便宜品）と，装飾品などのように，人によって好みがあり，買う人が方々で選ぶもの（選択品）との区別がある。次に，タイプライターやミシンなどのように，それを使うのに特別な知識・技能が必要なものは，専門の商店で取り扱われ，こうしたものを専門品とよんでいる。さらに，商品のうちには政府の専売品になっているものや，あるいは専売特許をうけたものだけが生産する商品もある。

○ 日常生活に直接消費されない商品としては，どんなものがあるかを調べてみよう。

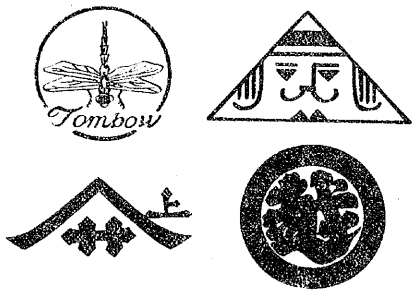
○ 商品の標準化には，どんな利益があるかを考えてみよう。

○ 政府の専売品には，どんなものがあるかを調べてみよう。

○ 専売特許をうけている商品にはどんなものがあるか，また，それはどうしてわかるかを調べてみよう。

(2) 商　標

次に，こうした商品には，たいていそれを作ったところの標（しるし）がついている。また，百貨店などではその販売する商品に自分の店の標をつけることが多い。これらの標が商標である。商標にはさまざまな形や意匠があるが，これを商品につけておくと，ほかの同じ種類の商品と区別がしやすいばかりでなく，売買の際に便利であり，また，商品に責任が持てることになって，その信用を高めるなど多くの利益がある。したがって，他人が同じ商標をまねることを防ぐため，特許局に願い出て登録商標とすることが多い。



○ 商標と店の信用とはどんな関係があるかを考えてみよう。

○ いろいろの商標について，どんな形やどんな意匠のものがよいか，比べてみよう。

(3) 商品の数量と度量衡

ものの長さや目方，あるいは大きさなどをはっきりした数字であらわすことは，いつでも必要なことであるが，特に，商品を売買する際にはたいせつなことである。

商品の数量をあらわす方法は，商品の品質や売買の習慣などによって違うことが多いが，だいたい箇数による場合と，度量衡による場合とがある。

袋・俵・たる・かます・はこ・びん・かん などというものや荷造りのきまっている商品は，何箇・何ダース・何グロスなど，箇数によって計算する。

度量衡によるものは，針金 10 メートル，鉄板 5 平方メートルというように長さや面積によるもの，石炭 10 トンというよ

うに目方（重量）によるもの，しょうゆ1リットルというように容積によるものなどがある。しかし，度量衡の計算單位には，メートル法，ヤード・ポンド法，尺貫法などがあり，わが國ではそれが共に使われているのは非常に不便である。そこで，昭和33年12月以降は，メートル法に統一することになっている。

なお，商品を重量によって計算する場合には，そのいれものや包装材料の重量（ふうたい）を全体の重量（総量）から差し引き，正味の重量（純量）だけで計算する場合と，また，総量で計算する場合（皆掛）とがある。

さらに，商品の中には，それを運送する途中でこぼれたり，または，砂やごみがまじったりして重量の変わるものがある。こうした商品は，あらかじめ一定の数量を加減して計算するものである。

○度量衡器にはどんなものがあるか，また，その取り扱いの方法にはどんな注意が必要かを調べてみよう。

○度量衡器を正しくすることは，なぜたいせつかを考えてみよう。

○度量衡器の検査は，なぜ行われるかを考えてみよう。

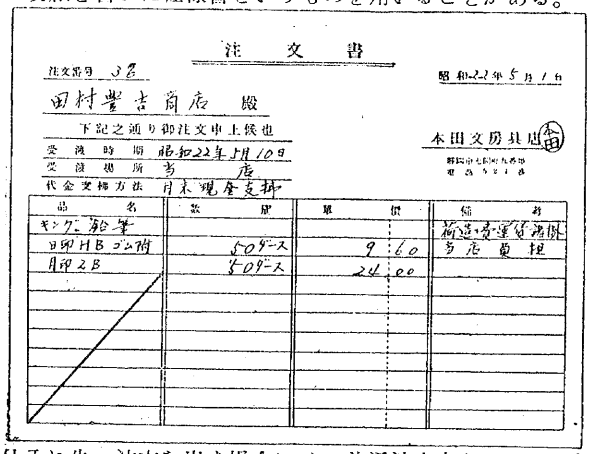
○物の分量を計算する方法の発達を調べてみよう。

(4) 仕入れと注文

小売商や卸商が他へ売り渡すために，商品を買い入れることが仕入れである。仕入れのために，商品を注文する場合には，何を（品質及び値段），いくら（数量），いつ（受け渡しの時期），どこで（受け渡しの場所）ときめて注文し，また，その代金を

どんな方法で支拂うかも約束しておかなくてはならない。

注文の際，売り手と買い手が直接会って話をすることのできる場合には，よく商品を見て売買の約束をすることができるが，そうでない場合には，銘がらや商標などできめることも多い。また，特別な機械や器具を注文する場合には，その形や寸法などの明細を書いた仕様書というものを用いることがある。



注　文　書

注文番号 32　　昭和22年5月1日

田村書店商店　殿

下記之通り御注文申上候也

受渡時期 昭和22年7月10日

受渡場所 当店

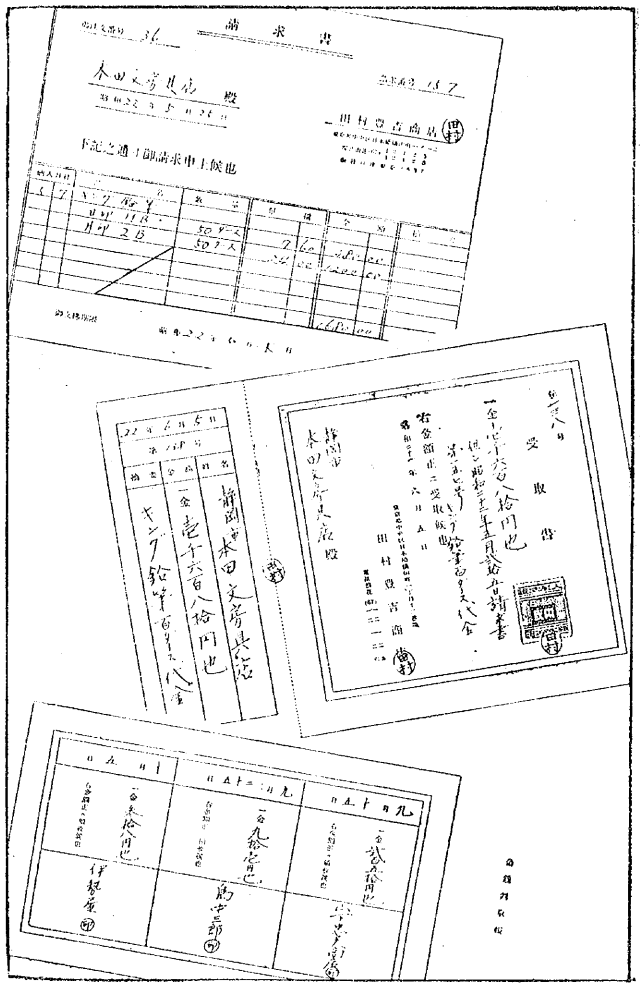
代金支拂方法 月末現金支拂

本田文房具店

品名	数量	単価	備考
ギンケン鉛筆			荷造・発送費当方負担
日印HBゴム付	50ダース	9.60	当店負担
日印2B	50ダース	24.00	

仕入れ先へ注文を出す場合には，普通注文書を作るが，場合によっては直接仕入れ先へ行って話をしたり，急ぐ場合には電話や電信で注文することもある。

注文をうけたら注文どおりの商品を正しく，また，約束した時期を違えず納めることがたいせつである。不正なものを納めたり，時期を遅らせたりすると，相手に迷惑をかけるばかりでなく，自分の信用を失うことになる。殊に，將來，外國と多くの商品を売買することが盛んになった場合には，いっそうこの



注意が必要である。

○消費者はどういう注意で，商品を買い入れたらよいかを考えてみよう。

○見本取引について注意すべき点を考えてみよう。

なお，配給が統制されている商品は，仕入れ先，仕入れる時期，その品質・数量などが，みなきまっていることが多い。

○仕入れにはどんな注意が必要か，またどんな準備をしたらよいかを考えてみよう。

○注文をうけたらどんな態度をとればよいかを考えてみよう。

○商品の品質はどうして見分けるかを考えてみよう。

○注文書に注文事項を記入してみよう。

○注文するにはどんな方法があるかを調べてみよう。

○代金支拂いの方法及び時期について調べてみよう。

○商品の受け渡し方法は，その時期・場所などによってどう区別されるかを調べてみよう。

○商品の注文方法には，どんな種類があるかを調べてみよう。

(5) 販売と廣告

○商人が商品を売るときの心構えは，どうあるべきかを考えてみよう。

小売商でも，卸商でも，あるいは生産者でも，商品を取り扱うものは，それができるだけよく売れるようにすることが必要である。そのためには，商品の販売について，いろいろと工夫・努力をしなくてはならない。たとえば，仕入れの際に商品の品質や値段などを吟味し，また，市場の分析を行い，販売の計画

をたて，あるいは，お客の應対を親切にするなどのことがたいせつである。さらに，商品の売れ行きをよくするためには，廣告することが必要である。廣告の方法には，新聞や雑誌の廣告を利用したり，ポスター・立て札・廣告塔・ネオンサイン・氣球（アドバルーン）などによったり，あるいは，直接お客に見本やカタログなどを送ったりするなど，さまざまな方法がある。また，廣告をする場合には，新しい商品をお客に知らせたり，商品の品質やその使い方などを，お客に知らせることもたいせつである。しかし，廣告と実際の商品とが違ったり，また，廣告の費用がかさんで，販売する商品の値段が高くなるなどのことはさけなくてはならない。

なお，配給が統制されている商品の販売でもそれは正しく，またできるだけ早く消費者に渡ることが必要である。

- ○販売を増進するには，どんなことに注意すればよいかを調べてみよう。
- ○廣告の効果を大きくするには，どんな工夫がたいせつかを調べてみよう。
- ○廣告方法には，どんな種類があるかを調べてみよう。
- ○新聞や雑誌について，廣告料はどれくらいかを調べてみよう。
- ○一つの商品を考えてポスターを書いてみよう。

6. 配給の統制

われわれが，毎日の生活に必要とするものの中には，現在，

割り当てられた数量だけしか，消費できないことになっているものが多い。たとえば，米そのほかの食料品をはじめとして，燃料も衣料もたいていの日用品は，きめられた数量の配給制度になっている。これはなぜであろうか。

それはいうまでもなく，現在わが國で生産できるものが少ないからである。少ないものの配給を自由に放任しておくと，いろいろふつごうなことが起りやすい。そこで，政府が特に必要なものの配給について統制を加えるのである。このため政府は生産できるものの数量によって，國民が一人当たり消費することのできる分量をきめ，また，この割り当てたものが正しく配給されるような方法を考え，少ないものでも，それが國民全体にできるだけ公平に行きわたるように工夫するのである。したがって，たくさん生産できるものは，一人当たりの割り当ても多くなるし，さらに，すべての人が自由に消費してもよいだけ生産ができるようになれば，こうした配給の統制はその必要がなくなるわけである。このように，配給の割り当ては，そのものの生産によってきまるから，その分量は品物によって多い少ないがあり，また，時期によっても違うことがある。さらに，同じ品物でも人によって割り当ての分量が違ったり，あるいは人によって全然割り当てのないこともある。しかし，割り当てたものを配給する場合には，それを正しく，またできるだけ早く配給することがたいせつであるから，そのためにつごうのよい配給のしくみをこしらえたり，あるいは，通帳・切符または登録などの方法を利用するのである。

なお，このような配給の統制はおもに政府が中心となり，小売商や卸商などの，配給の仕事にたずさわる者がこれに協力して，全国に同じような統制の方法を行うことが多い。しかし，地方ごとに，あるいは品物について，特別の配給統制を行ったり，あるいは，配給の仕事をする者たちが相談して，進んで商品の配給統制を行うことも多いのである。いずれにしても，配給担当者は良心的でなければならない。

○配給の統制を行うのはどういうわけかを調べてみよう。

○商人は配給統制にどう協力したらよいかを考えてみよう。

○われわれ消費者は，配給の統制にどう協力したらよいかを考えてみよう。

○現在どんなものが配給統制をうけているかを調べてみよう。

○政府は配給統制のために，どんなしくみを設けているかを石炭について調べてみよう。

○標準店とはどんな店かを復習しよう。

7. 外國貿易

○外國との貿易はどうして起ったかを考えてみよう。

われわれが，毎日使っているものの中には，それが全く外國で生産されたものもあり，また，わが國で生産したものでも，その原料が外國でとれたものがある。現在，われわれのたべる小麦粉はわが國で製造されるが，その原料である小麦の一部はアメリカで作られたものである。また，われわれの着物や洋服はわが國で織ったものであるが，その原料である綿花や羊毛は，

アメリカ・インド・オーストラリアなどで生産されたものである。それでは，こうした外國で生産されたものを，どうしてわれわれが消費することができるのであろうか。

わが國の輸出入貿易統計（單位千円 △印輸入超過）

年次	輸出	輸入	超過
明治 2—6平均	16,316	26,144	△ 9,828
7—11 〃	22,995	27,539	△ 4,544
12—16 〃	32,323	31,732	1,591
17—21 〃	47,619	40,272	7,347
22—26 〃	77,632	75,488	2,144
27—31 〃	140,856	205,371	△ 64,515
32—36 〃	253,977	287,376	△ 33,399
37—41 〃	392,349	452,900	△ 60,551
42—大正2 〃	516,359	564,673	△ 48,314
大正 3—7 〃	1,231,680	936,228	295,452
8—12 〃	1,741,977	2,046,557	△ 304,580
13—昭和3 〃	2,065,306	2,395,215	△ 329,909
昭和 4—8 〃	1,607,298	1,669,332	△ 62,034
9—13 〃	2,645,814	2,793,027	△ 147,213
14—18 〃	2,661,595	2,588,988	72,607
12年	3,175,418	3,783,177	△ 607,759
13年	2,689,677	2,663,440	26,237
14年	3,576,370	2,917,666	658,704
15年	3,655,850	3,452,725	203,125
16年	2,655,865	2,898,565	△ 242,700
17年	1,792,547	1,751,637	40,910
18年	1,627,350	1,924,350	△ 297,000
19年	1,298,198	1,944,834	△ 646,636
20年1—6月	353,219	831,277	△ 478,058
21年1—9月	2,059,909	1,986,049	73,860

われわれが生活のためにぜひ必要とするものの中には，それがわが國では十分生産することのできないものや，また，全然生産することのできないものもある。また，中には外國の人々が必要とするもので，それがわが國で特によく生産できるものもある。

○わが國でよくできて，外國人の必要とするものには，どんなものがあるかを調べてみよう。

そこで，われわれは，われわれの必要とするものをたくさん生産する國と相談し，その國の必要なものをこちらから分けて

やり，それと引きかえにわれわれの必要なものを分けてもらうことができれば，おたがいに便利である。このように，國と國との間で品物のやりとりをすることが貿易である。われわれが自國で生産することのできないものを消費することができるのは，こうした貿易によって必要なものを手に入れるからである。貿易は，このようにたいせつなものであるから，どこの國もこれを盛んにしようとつとめている。

さて，現在世界各國は，いずれもおたがいに貿易を行って，多くの品物のやりとりをしているが，それはなぜだろう。それは各國のもつ資源や人口が違うばかりでなく，文化の程度も違うので，どこの國でも自分の國の必要なものを，全部自分の國だけで生産することができるとは限らない。不足のものや，また生産できないものは，外國から分けてもらわなくてはならないからである。さらに，各國はいずれもみな，ものを生産する力や，また生産するものが違っている。ある國は，ものを生産する力が大きくて，よいものをたくさん作り，ある國はその力が小さく，少しのものしか生産されない。また，ものを作る方法の極めて進歩している國もあれば，また非常に遅れている國もある。そこで，こうした國々がおたがいに自分の國で生産したものと，他の國で生産したものとを取りかえようとして，貿易を行うのである。特に，ものを生産する力の大きい國や，またはものを生産する方法の進んでいる國が，自國で生産したものを廣く世界中に売りひろめるために，貿易を行うことが多いのである。

○外國品で作られている日常用品には，どんなものがあるかを調べてみよう。

このように，國と國との間に貿易が行われるようになると，いろいろの点でつごうのよいことが多くなる。たとえば原料の少ない國は，それを多い國から分けてもらって，必要なものを生産することができるし，こうして生産したものを外國へ分けてやることもできる。各國はいずれも自分の國で生産できないものは，外國から分けてもらい，あるいはたくさん生産できるものは外國に分けてやるようにして，それぞれの國が，專門のものを分業で生産することができるようになる。さらに，外國からよい品物がはいって來ると，その作り方や，よい点を学んで，自分の國でもそれを作ることに，工夫するようになることも多い。あるいは貿易が盛んになると，人の往來もはげしくなるから，國と國との交際も深まり，ひいては世界中の人々が，一つになって生活することもできるようになる。

○外國貿易が開けたために進歩したものについて考えてみよう。

このように，貿易を行うことは，その國だけの利益ではなく，世界全体のために利益であるから，貿易は非常にたいせつな働きである。このため，現在，世界各國は貿易について，いろいろのとりきめを相談しあい，それを実行している。

次に，外國へ品物を出すことを輸出，外國から品物を手に入れることを輸入というが，輸出や輸入には，品物の代金をおかねで受け渡しするのが普通である。しかし，場合によっては品

物と品物との交換（バーターシステム）で貿易を行うことも少なくない。また，貿易はその國にとってたいせつなことであるから，どこの國でも，政府が貿易については嚴重な取り締まりを行っている。たとえば，自分の國にとって非常にたいせつなものは，その輸出を制限したり，あるいは禁止したりすることが多く，輸入するものには稅金をかけることが多い。

なお，わが國は資源も少なく，生產力も小さく，しかも人口が多いので，國民の必要なものを輸入しなければ，たちゆかないので，貿易は非常にたいせつであるから，貿易の仕事はすべて政府がこれを統かつし，貿易廳がそれに当たっている。

現在の外國貿易のしくみは，政府の行う政府貿易と，民間で行う民間貿易とで異なるが，民間貿易のしくみは大体次のようである。

東京及び重要な都市にある貿易館に，輸出商や製造家(業者)が見本を陳列しておき，バイヤー（在日代表）がそれを見て，その業者と商談を進める。しかし実際にはバイヤーの宿泊するホテルに，業者が見本を持って行って商談を進めることが多い。又直接外國商へ，見本・カタログ・プライスリスト等を送って商談を進める。値段をはじめいろいろの取りきめができると，売買契約書という売買についての約束書を作って，輸出許可申請書と共に貿易廳に差し出す。政府と進駐軍総司令部の許しがあれば，外國に輸出することができる。船に積み込むにもまた許可を受けて，船をまわしてもらうのである。輸出商品の代金は，日本のお金で取引銀行から支拂われるが，貿易廳は，円貨

に対して責任をもつ。外國商人が支拂った外國のお金は外國の銀行に預けておき，日本で必要とする食糧品，綿花その他を輸入したものの支拂いに用いる。したがって食糧品などの必要なものを多く輸入するには，輸出を盛んにしなくてはならない。

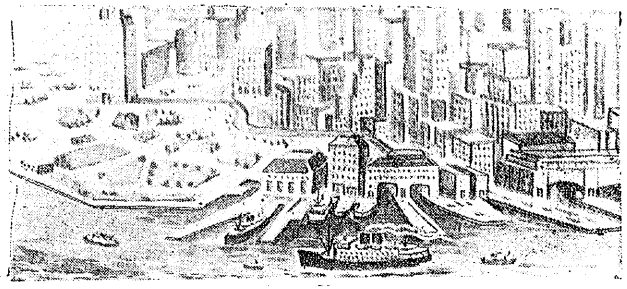
○わが國はどこからどんなものを輸入し，また，どこへどんなものを輸出するかを調べてみよう。
○わが國に輸入しなければならないものは，どんなものかを調べてみよう。
○わが國が輸出しうるものは，どんなものかを調べてみよう。
○外國貿易はなぜたいせつか，また，それは配給とどんな関係があるかを考えてみよう。
○なぜ輸出制限または禁止をしたり，輸入稅などをかけるかを考えてみよう。

8. 商港及び税関

○外國の品物はどうして，どこで，わが國に陸上げされるかを調べてみよう。

貨物の積み降しや，旅客の乘降の行われる港を商港といい，そのうち，外國貿易のために使われるものを開港とよんでいる。

商港には，船の出入りや てい泊 を便利にするための，いろいろの設備や，あるいは貨物の積み降し・保管，旅客の乘降などを便利にするため，さん橋・岸壁・起重機・上屋（うわや）・食庫・臨港鉄道などが設けられている。



ニューヨーク港

また，おもな開港場その他には，税関が置かれるが，税関は税金（関税）を取りたてたり，船や貨物の取り締まりその他を行うところである。さらに，横浜・神戸には輸出をする生糸の検査所がある。

○わが國のおもな商港を調べてみよう。また，そのうち開港はどれかを調べてみよう。

○生糸検査所はなんのためにあるかを調べてみよう。

○國内の産業がまだ幼稚なとき，関税はどんな役割りをもつかを調べてみよう。

○植物検査所はなぜ設けられたかを考えてみよう。

○人間や動物の病氣についてはどうかを調べてみよう。

9. 商工会議所と商業興信所

商工業の発達をはかるため，都市その他の商工業者が集まって商工会議所を設けるが，これは商工業についての，いろいろな情報を集めたり，世話を行ったり，証明や鑑定を扱ったり，

あるいは統計の調査その他を行って，商工業の改善・発達をはかる仕事をする。また，商工会議所は，商工業について，通商産業省その他の官廳と連絡をとることが多い。

次に，商人はその取引先について，十分な知識を持つことが必要であるから，取引先の営業狀態や財産・信用狀態ばかりでなく，相手の人物や才能などについてもよく調べなくてはならない。こうした調査を信用調査といい，これは商人みずからがその取引先について調べることもあるが，この調査を専門に行っている商業興信所を利用することが便利である。

○商工会議所で行っている仕事について調べてみよう。

○信用調査はなぜ必要かを考えてみよう。

○商業に信用がたいせつなことは，どこでわかるかを考えてみよう。

10. スクールストア

○学校売店を作って配給の仕事をすれば，どういう利益があるかを考えてみよう。

○学校売店を作るには，どうすればよいか研究しよう。

学校売店を作るには，賛成者数人でいろいろ相談をして準備を進めるが，まず学校売店のもとになる規約をつくらなくてはならない。この規約の中でいろいろのことを定めるが，最も必要なことは，学校売店のすること（目的），名前（名称），もとでを用意する方法や金額（出資に関すること），売店の計画をたてたり実際に仕事をする人（役員）などについての規定を作るこ

とである。

○一人で商店をつくる場合と，多数の者がいっしょになって商店を作る場合は，その作る方法がどう異なるか調べてみよう。

○学校の近くにある商店・銀行・会社・協同組合の「もとで」は，どういう方法で用意されたか研究してみよう。

学校売店を作って配給のことを行うには，まずもとでを用意しなくてはならない。もとでとして用意するものは，おかねでもよければ，売店で用いる机，戸だな・金庫などでもよい。このもとでを用意するには，校友会より借りてもよい。また全部の生徒より一定のおかねを借りてもよい。もとでを出すことを出資するという。生徒が出資すれば卒業(脱退)の時には返さなくてはならない。もとでが用意されれば，直ちに生徒大会（創立総会）を開いて，今までのことを報告したり，これから売店のことを実際に計画したり，実行したりする役員を定める。これが終れば売店は成立する。このように事業を行うものを作ることを設立といい，設立のためいろいろの準備をした者を発起人という。

売店が成立しても実際に仕事をするには，なおいろいろの準備がいる。まず店舗（売店）が必要で，これは学校内の便利のよい場所を選び，売り場台・陳列台やたな，在庫品を保管する戸だなどの設備をしなくてはならない。また商品やおかねの変動を記録する帳簿を備えたり，実際に仕事を行う係を定める必要がある。係は，部長，仕入係，販売係，会計係，監督係とし

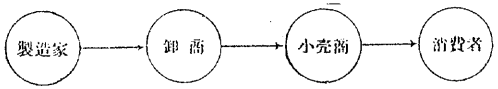
て，おのおのの仕事を分担するがよい。

○店舗の設計をしてみよう。

○学校売店に必要な帳簿と記入の仕方を簿記の教科書で研究し，もとでとしておかねが入金したこと，設備のためおかねが出たことを帳簿に記入しよう。

○インクの仕入れについて研究しよう。

学校売店の仕事は，商品を仕入れて販売することであるから，まず商品を仕入れなくてはならない。インクは値段の統制を受けているが，配給の統制はうけていないから，自由に仕入れることができる。インクの配給のしくみは



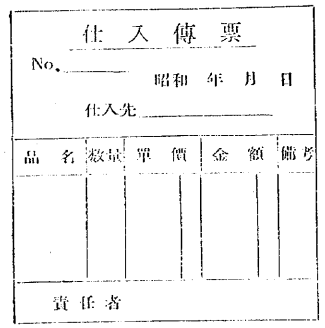
で，学校売店は小売商の立場であるから，卸商より仕入れることになる。仕入先は便利のよい，信用のある店を選ばなくてはならない。また注文をするにはまず仕入れるインクの品質・値段・数量，その他すでに習ったいろいろのことについて，約束をする。品質は現品や見本を見て定めるほか，銘柄・商標・標準によって定めることもできる。値段のことについては第二学年で習うが，現在インクの値段は統制されていて，製造販売價格・卸販売價格・小売販売價格の三つの値段があって，おのおの定められているから，卸販売價格で仕入れることになる。

注文をする際，注文書を用いる時は複写にし，後日の参考のため控えをとっておくことが必要である。

注文を仕入先が引き受ければ，約束によってインクを取りに行くか(現場渡し，売手の店渡し)，先方より届けてくれる（持ち込み，買手の店渡し)。持ち込みの場合には納品傳票または送り狀を商品と共に持ってくる。これらの書類には品名・数量・單價・金額が書いてあるから，現品と照らし合わせて商品を受け取らなくてはならない。商品を受け取る時は品質・数量・破損品をよく調べ，間違いや破損品があったら直ちに申し出る。後になれば代金の値引や取りかえができなくなる。

運送人が商品を運搬した時は運賃を支拂うが，当方が支拂うか，先方が支拂うかは約束できまる。

インクを仕入れた時には，仕入係は仕入傳票を作って帳簿に記入する。



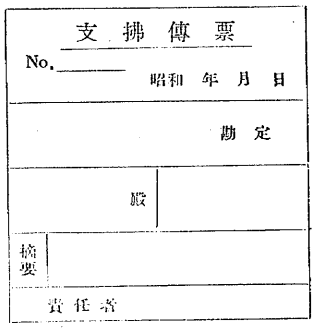
仕入傳票

No.＿＿＿　昭和　年　月　日

仕入先＿＿＿＿＿＿

品名	数量	單價	金額	備考

責任者



支拂傳票

No.＿＿＿　昭和　年　月　日

勘定

借	
摘要	

責任者

商品を仕入れたら直ちにおかねを支拂う場合を現金仕入れといい，後日支拂う場合を掛仕入れという。おかねを支拂う方からいえば現金拂，後拂である。さらに仕入れの前に拂う前拂もある。掛仕入の時は月末に支拂請求書により支拂を請求されたなら，

お金を支拂わなくてはならない。

商品の仕入代金・運賃，その他のためにおかねを支拂う時は，会計係は支拂傳票をつくって，帳簿に記入の上おかねを支拂う。おかねを支拂った時には，いつも領收書をもらうことを忘れてはならない。領收書はおかねを受け取ったというたいせつなしょうこである。

こちらより出した手紙や注文書の控えや，先方より受け取った納品傳票や領收書は，後日参考として必要のことがあるから，整理をしてたいせつに保管しておくことが必要である。

○インクの仕入代金や運賃を支拂ったことを記帳しよう。

○生徒の必要とするいろいろの学用品を仕入れよう。

○仕入れたいろいろの学用品を台やたなにどう陳列したらよいか工夫してみよう。

販売するには買う者の注意をひき，さらに買いたいという氣持ちを起させることが必要である。また買う者にはよく調べて安くてよい品物を買いたいと思う氣持ちがある。だから販売する商品は人目のつくように，また自由に手にとって見られるように陳列しておくがよい。商品を陳列するには同じ種類のものは同じ場所に集めておけば，比較して見るにつごうがよいし，またインク・ペン先・ペン軸のように互いに関係のあるものは同じ所に集めておけば，ついでに買うという氣持ちを起させるものである。さらに陳列する商品には定價をつけておくか，値段表をかかげておけば買う者のために便利である。

販売の仕事をする者は商品につきいろいろ説明をしてやり，

買う者が安心して買うことができるように心掛ける必要がある。

○売價について考えてみよう。

学校売店では現金売をして掛売はしない方がよい。掛売をすると集金に困難するからである。統制品の値段は定められた小売販売價格で売らなくてはならないが，値段の統制のない商品の売價は自由に定めることができる。売價は仕入れた値段に経費と利益を加えて定める。売店が事業を行うには，傳票を作ったり，紙や鉛筆を使ったりするので経費がかかるから，この経費は商品を販売することによって回收しなくてはならない。経費を商品に割り当てて，商品の販売により回收すれば利益は予定通り上げることができる。

○毎日の売上高を知る方法を研究しよう。

賣上傳票					
昭和　年　月　日					
品名	数量	單價		金額	備考
責任者					

商品を販売すればそのつど売上傳票に記入し，閉店後毎日売上傳票の金額を集計すれば毎日の売上高を知ることができるので，手もとにあるおかねと照らし合わせてみれば間違いがあるか無いかがわかる。また売上傳票を品名別に分けて集計すれば，どの商品が何程売れたかも知ることができる。しかし忙しい時は売上傳票を書き落すことがある。毎日開店前商品の数量を調べておき，閉店後現在高を調べて比較をすれば，売上傳票がなくても売上量を知ることができる。このように商品の現在高を実地に調べること

を商品のたな卸といい，たな卸をして売上を知る時は商品別に一枚の売上傳票を作ればよい。

販売係は閉店後毎日売上傳票より帳簿に記入し，お金は会計係にまわす。会計係は入金傳票を作って帳簿に記入し，お金は金庫に保管する。

入金傳票	
昭和　年　月　日	
殿	
摘要	
責任者	

○たな卸表の作り方を簿記の教科書で研究しよう。

○仕入傳票と売上傳票，入金傳票と支拂傳票を直ちに区別することができるようにするには，どうすればよいか考えてみよう。

○委託販売について研究しよう。

新しい商品で売れるかどうかわからないものを扱う時は，まず商店に依頼して，商品を預りその商店のために販売して売上代金と残品を返すしくみでやればつごうがよい。このようなやり方を委託販売といい，売上代金を拂う時は約束した手数

賣上勘定書			
昭和　年　月　日			
殿			
○○学校○○部			
御委託品の賣上計算下記の通りでございます			
何々 200	@¥10−		2,000
残品 50			500
売上 150	@¥10−		1,500
―― 諸	掛 ――		
△△売上手数料	@2%	××30	30
		手取金	1,470
上記御手取金現金払			

料を差し引いた残り（手取金）を拂うのが普通である。委託販売では売上勘定書を作って先方の店に報告する。

○販売係が居なくても自由に買える店（自由販売店）を試みよう。この場合正しく売上を知る方法を考えてみよう。

○売店の財産狀態や営業の成績を調べてみよう。

売店のおかねや商品は毎日変わる。また損をしているか利益があるかもわからない。そこで少なくとも年二回ぐらいは，お金・貯金・商品・設備，売店で用いる用具などのたな卸(実地調査)をして，売店の財産狀態を知ったり，また損益の計算をして純利益や純損失の高を知ることは，売店を経営する上に必要である。この手続きを決算といって簿記で習うところである。決算の結果は発表しなくてはならない。

○純利益はどうするものか研究しよう。

利益はもとでが増した部分で，これはおかねとか商品とかの形になっている。だから利益は單に計算の上でいわれることで，利益という特別のものがあるのではない。利益は出資した人に出資の割り合いで分けるのが原則である。しかし売店が損をすることもあるから，その用意のために一部は売店に残し余りを分けるのである。分けるにはおかねで分けるのがつごうがよい。校友会が出資をすれば，得た利益で学校の必要なものが買えるしまた利益をあげる必要がなければ，商品を安く売ってもよい。

学校売店は，学校の必要なものを買うため利益をあげる目的で経営することもできるし，また利益をあげる代わりに生徒に安く学用品を売る目的で経営することもできる。

4. ものを運ぶには（交通及び通信）

いろいろの交通

○交通がとだえた場合，われわれの生活はどうなるかを想像してみよう。

われわれが毎日使っているものの中には，非常に遠いところで生産されたものが多い。たとえば，都会に住む人の消費する米や野菜は，いなかの農家で作られたものであり，いなかの農家が使う日用品・肥料その他は，たいてい都会の工場で作られたものである。また中には，はるばる海を渡って，外國から持って來られたものも少なくない。このように遠い所で生産されたものが，どうして，われわれの手にはいるのであろうか。いうまでもなく，それは遠いところから，鉄道や船によって運ばれるからである。

もともと，ものを生産するところと，それを消費するところとでは，おたがいに離れていることが多いのであるから，生産したものを，消費するところへ配給するためには，それを，あちらこちらに，運ばなくてはならない。しかも，遠いところへ一時にたくさんのものを，運ばなくてはならないことが多いのであるから，鉄道や船などの，交通機関が必要になるのはいうまでもない。

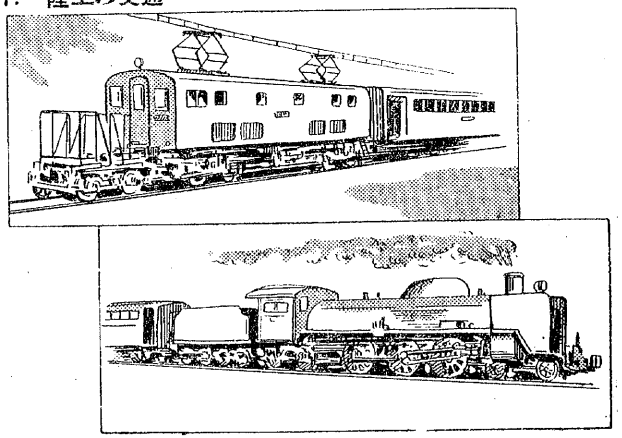
次に，われわれが用をたすためや，つとめに通うために，遠いところへ行く必要がある場合には，電車や汽車などの交通機関を利用すると，たいそう便利であり，時間の節約となり，ま

た，それだけよけいに仕事ができる。

交通機関が発達すると，生産や配給，あるいは，われわれの往來のためにつごうがよいばかりでなく，知識をひろめ，藝術を盛んにし，文化を向上させるためにも，さらに，國の政治を行うためにも，世界中の人々が，仲よくいっしょに暮らして行くためにも，つごうのよいことが多い。最近は，多くの機械の発明や改良が行われ，交通機関はますます発達して來ている。

交通機関はそれが陸上であるか，海上であるか，あるいは空中であるかによって，用いる機関が違い，また，車や船の機関を動かすものに，石炭を使うか，石油を使うか，あるいは電氣を使うかなどによっても違う。次に，交通機関についていろいろ調べてみよう。

1. 陸上の交通



(1) 鉄道交通

鉄道は陸上交通機関のうちで，最もたいせつなものであり，ほかの交通機関と比べると，安全でしかも正確に，たくさんのものや人を運ぶことができる点にその特徴がある。

1. 鉄道の種類 鉄道はいろいろの点で区別されるが，まず軌道（レール）の幅によって狭軌と廣軌とに区別され，また，軌道の数によって單線・複線などに区別され，あるいは軌道の位置によって高架線・地上線・地下線などに区別される。

- ○狭軌・廣軌の軌道の幅はそれぞれどれくらいか，また，わが國にはどちらのものが多いかを調べてみよう。
- ○ものや人を運ぶに狭軌と廣軌とではどちらがよいか，またそのわけを考えてみよう。
- ○高架線はどんなところにあるか，また，地下線はどうか。
- ○地上線と地下線との長所と短所とを比べてみよう。

また，鉄道は機関車の動力に何を使うかで，蒸氣鉄道と電氣鉄道とに区別される。

- ○動力には何が使われるかを調べてみよう。また，いろいろの動力の長所と短所を比べてみよう。
- ○わが國の鉄道はどんな狀況の線に，どんな動力を使っているかを調べてみよう。

なお，鉄道のうち，特にたいせつな線を幹線，その他の線を枝線（支線）と呼んで区別することもある。

- ○わが國の幹線を地図に記入し，その名まえ及び途中のおもな駅名を書いてみよう。

次に，わが國ではおもな鉄道を政府が経営するので，これを國有鉄道といい，民間の人や地方自治團体が経営するものを，私有鉄道（私設鉄道）または公有鉄道といっている。また，普通の鉄道は汽車を使い，遠いところへ，たくさんのものや人を運ぶのであるが，大きな都会やその郊外には，おもに通勤や用たしの人を運ぶための電車がある。このうち，省線電車は國有鉄道の一部であるが，市内電車や郊外電車はたいてい私有または公有鉄道である。

○ 自分の住む町の近くに，どんな私有鉄道があるかを調べてみよう。

○ 國有鉄道と私有鉄道との長所と短所とを比べてみよう。

2. 旅客の輸送　われわれは旅行や通勤・通学などのために，鉄道を利用することが少なくない。鉄道では旅客の輸送についてどんな取り扱いをしているか，次にこれを調べてみよう。

まず，汽車や電車に乗るには切符（乗車券）を買わなくてはならないが，その料金（運賃）は近い距離の電車などでは均一のところがあり，遠い距離の場合にはその距離によって計算される。しかし，この場合には距離が遠くなるにつれて，1キロメートル当たりの運賃は安くなる。また運賃には，等級による区別があり，さらに，急行列車には乗車券のほかに急行券が必要である。次に，乗車券には普通乗車券のほかに，回数券・定期券・割引券などがあって，旅客の便宜をはかっている。また乗車券は，いずれもその通用期間がきまっているから，注意することがたいせつである。

鉄道では，旅客が旅行する際に，他人に迷惑にならないよう，荷物の種類や大きさをきめ，これを車内に持ちこむことを許している。また，手に持つことのできないものは，手荷物として取り扱い，旅客列車につけた荷物車で運び，着いた駅で旅客に渡すようにしている。

なお，大きな都会には，たいてい日本交通公社というものがあって，切符その他旅行について便宜をはかってくれるから，これを利用するとつごうがよい。

石炭や車両が不足して，列車や電車が十分運轉できないような場合には，鉄道では乗車券の発売数を制限したり，あるいは乗車を指定したり，乗車票を発行したり，または荷物の取り扱いを制限したりすることがたびたびある。

○ 鉄道の旅客運賃は，どんな方法で計算されるかを調べてみよう。

○ 車内持ちこみが禁止されているものはどんなものか，また，持ちこみの許される容積はどのくらいかを調べてみよう。

○ 手荷物は1人何キロまで託送できるか，また料金はどうかを調べてみよう。

○ なんのために乗車制限をするのか，また，その方法にどんなものがあるかを調べてみよう。

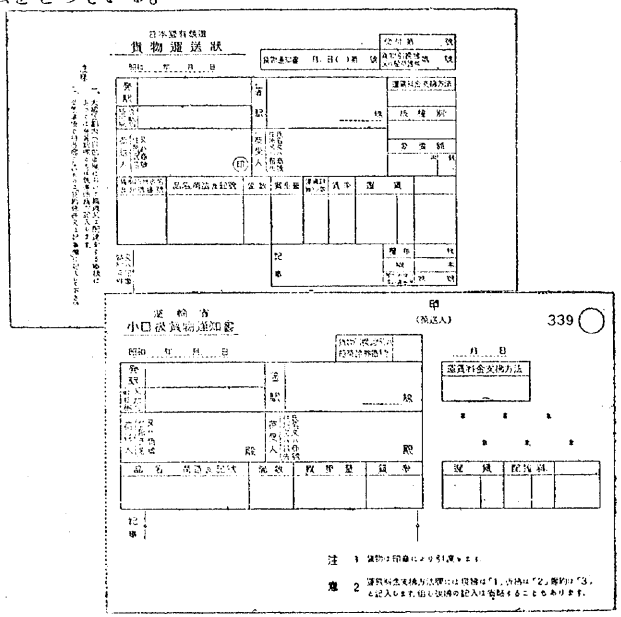
○ 不用の乗車券は拂いもどしがうけられるか，また，その料金はいくらかを調べてみよう。

○ 急行券や列車指定はなぜ行われるかを考えてみよう。

○ 二等と三等との運賃はどう違うかを調べてみよう。

○所在地から，東京または大阪へ，團体修学旅行の計画を立ててみよう。

3. 貨物の運送　方々の工場や農家で生産したものを，消費するところへ配給し，また，工場や農家へ原料・肥料などを配給するためには，大量の貨物を輸送することが必要である。そのほか，商人が商品を送ったり，われわれが引越しをする際のように，大量の貨物を一時に遠いところまで，運送する必要がある場合は極めて多い。こうした場合には，たいてい鉄道を利用するが，鉄道は貨物の運送について，次のような取り扱い方法をとっている。



まず貨物を分量の多少により小荷物と貨物とに分け，貨物はさらに小口扱いと車扱いとに分けて取り扱う。

(1) 小荷物　一定の重さ，長さ，大きさ以内の小量の荷物を送る場合に利用される扱いで，旅客列車に連結された荷物車ですみやかに運送される。臭氣を出したり，他の荷物をよごしたりするおそれのあるものや危険品は，この扱いをうけることができない。原則として配達をしてくれる。

(2) 小口扱い　貨物が割合に少ないときには，この取り扱いによる。鉄道では貨車への積み降しを扱うが，貨物を集めたり，配達する場合にはその料金をとるのが普通である。この取り扱いの料金は貨物の重量，運送の距離のほか，貨物によってきめられた等級や，貨車の大きさなどによって計算される。

(3) 車扱い　大量の貨物を運送する場合には，専用の貨車をきめ，なお，貨物の運賃はいろいろの理由で，割り増しや割り引きが行われることがある。

次に，貨車には，それに積みこむ貨物の種類によって各種のものがある。普通は，有がい車・無がい車に区別されるが，特別な貨車としては，冷凍車・通風車・家畜車・石炭車・タンク車などがある。

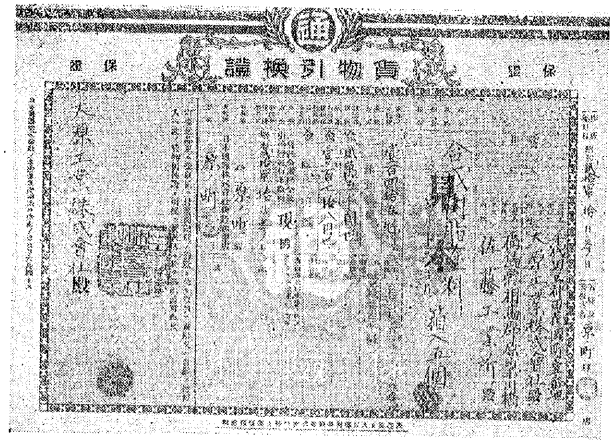
貨物の運送を頼むには，駅に行って係りの人に話せばよい。駅では運送を承諾し貨物を引き取ると，貨物通知書を渡してくれる。また貨物を送る人は，特別な必要のある場合には貨物通知書の代わりに，貨物引換証というものをもらうことができる。

○車扱いと小口扱いとでは，同じ貨物でどちらが安いかを調

べてみよう。

○車扱いにする貨物の等級及びその運賃を調べてみよう。

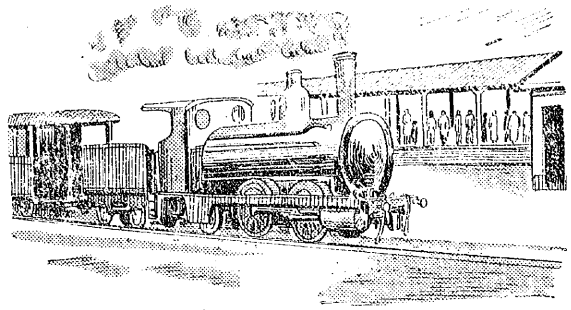
○貨物引換証とはどんなものかを調べてみよう



○駅（なるべく國鉄）に行って旅客及び貨物運送の実際を見学しよう。

○なお，東京では鉄道博物館も見学しよう。また，鉄道工場のあるところでは，そこも見学しよう。

4. わが國の鉄道　わが國の鉄道は明治5年に，東京・横浜間にはじめて開通して以來，年々非常な発達をして來た。しかし，國有鉄道も私有鉄道も大部分が狭軌であるため，旅客や貨物を運ぶ能力が十分でない。また，地勢の関係でトンネルや鉄橋が多く，こう配やカーブのところも少なくないので，運轉の困難が多い。しかし，わが國の鉄道は沿線の景色がよいこと，発着の時刻が非常に正確なことなどで有名である。最近は，戦



初期の鉄道

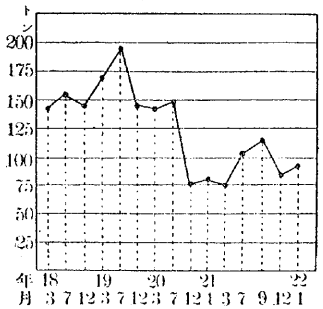
争で被った損害が大きかったため，鉄道による交通も完全ではないが，これをもとの狀態に改めるために，現在着々と復興の計画が進められている。

わが國の鉄道について次のことを調べてみよう。

○全部の鉄道を合計すれば総計何キロとなるか。

○一箇年平均の旅客数はどれくらいか。

○一箇年平均の輸送貨物はどれくらいか。



鉄道貨物発送トン数指数
（一箇月当り平均）
（昭和11年度各月基準）

○一箇年平均の石炭及び電力消費量はどれくらいか。

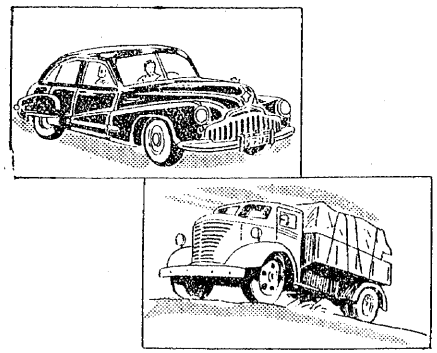
5. 鉄道の経営　鉄道は世の中の人のために，旅客や貨物の運送を取り扱うたいせつな任務を持っている。したがって，その事業は公共の利益を重んじなくてはならない。また鉄道の事

業を行うためには，多くの設備を用意し，廣い地域にわたって，常に同じ仕事をくり返すことが必要である。鉄道業には，こうした特徴があるから，それに伴なう多くの弊害をさけるため，わが國では，おもな線を國有鉄道とし，また地方の私有鉄道に対しても，政府が厳重な監督を行っているのである。

(2) 自動車交通

陸上の交通機関には，鉄道と並んで自動車が多く利用される。自動車は，大量の貨物や大勢の人を運ぶことにおいては鉄道に劣るが，鉄道よりも設備が少なくてすむから，近い距離や鉄道の通じないところでは，非常に便利である。

自動車には人を乗せるもの，貨物を運ぶもの，そのほかさまざまな目的に使われるものがあり，その大きさや形も一様ではない。また，自動車の燃料には，普通ガソリンが使われているが，ガソリン以外のものが使われることもある。



なお，自動車の経営は民間で行うことが多いが，政府みずからが乗合自動車を経営することもある。

○ 自動車と鉄道との長所と短所とを比べてみよう。

○ 自動車にはどんな種類があるかを調べてみよう。

○ ガソリン以外にどんな燃料が使われるか，またその長所・短所はどうかを調べてみよう。また，ほかによい燃料はないかどうかを研究してみよう。

○ 自動車が一番発達している國はどこかを調べてみよう。

○ わが國における自動車の使用状況は，これまでどんなであったかを調べてみよう。

○ 鉄道・自動車以外で陸上の交通機関には，どんなものがあるかを調べてみよう。

2. 海上の交通

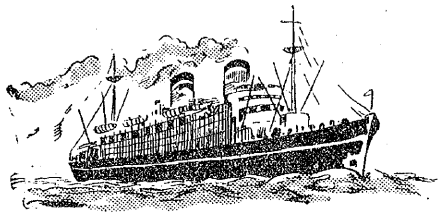
外國と交通し，貿易を行い，鉄道・自動車などによる陸上の交通を助けるためには，海上の交通が極めてたいせつである。海上の交通は陸上の交通に比べると，速力・安全・正確などの点では劣っているが，旅行には愉快であり，また大量のものを一時に運ぶことができるから，貨物の運送にはつごうがよい。

○ 水上輸送はどんな時に用いられ，どんな利益があるだろうか調べてみよう。

(1) 船

1. 船の種類　海上の交通に使われる船には，いろいろな区別がある。たとえば，動力によって帆船・汽船などに区別され，また，船を作る材料によって木造船・鉄鋼船などに，さらに，用途によって客船・貨物船などにも区別される。また，貨物船にもいろいろな種類がある。

○ 船の発達の歴史を調べてみよう。



客　　船

○船の動力に使うものを調べ，それぞれの長所と短所とを比べてみよう。

○貨物船にはどんな種類があるかを調べてみよう。

2.　トン数　船の大きさはトン数であらわすが，トン数には総トン数・純トン数・載貨トン数・排水トン数などの種類がある。

○四つのトン数の計算のしかた及び，どのトン数がどんな場合に使われるかを調べてみよう。

3.　節（ノット）　船の速力は節であらわすが，1節は1時間に1海里を走る速さである。

○時速 16 節とは1時間に何キロメートルを走る速さか計算してみよう。

4.　航路　廣い海上を交通する船も，その，いつも通る水路はだいたいきまっている。これが航路である。また，航路は内國航路と外國航路とに区別され，あるいは，定期航路・不定期航路などにも区別される。なお，海峡には鉄道を連絡する連絡航路がある。

○わが國の連絡航路とその設備について調べてみよう。

○廣い海上で航路がだいたいきまっているのはなぜかを調べてみよう。

○世界全体のおもな航路を地図に記入し，さらに，どこの國からどんなものが，どこの國へ運ばれるかを調べてみよう。

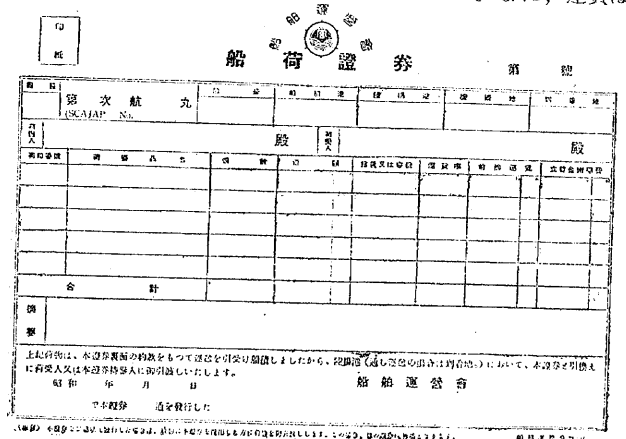
○船を一番たくさん持っている國はどこか，また，どのくらい大きい船があるかを調べてみよう。

(2)　旅客と貨物

1.　旅客の運送　旅客には等級があり，その運賃のなかには，毎日の食事代，そのほかの費用が含まれている。手荷物は一定の重さ以下のものは無料である。

○どれくらいの重さ以下であったら，手荷物の運賃が無料になるかを調べてみよう。

2.　貨物の運送　船で貨物を運送すると，鉄道よりも多くの貨物を一時に運ぶことができるので運賃が安い。また，運賃は



印紙

船荷證券　第　號

船名　第　次　航　丸　(SCAJAP No.)

荷受人　殿　　荷送人　殿

荷印番號　貨物名称　個数　容積　運賃支拂額　運賃率　前拂運賃　立替金額

合　計

摘要

上記貨物は、本證券裏面の約款をもって運送を引受り船積しましたから、證與證（通し證券の場合は別紙）とともに、本證券と引換えに荷受人又は本證券持參人に引渡いたします。

昭和　年　月　日　　船舶運營會

本證券　通を發行した

貨物の種類によって，その重量・容積・價格・箇数などをもとにして計算される。

貨物の運送を頼むと，会社から普通は船荷証券が渡されるが，貨物受取証が渡されることもある。いずれも，それと引きかえに貨物を受け取るのである。

○船荷証券と貨物受取証とはどこが違うかを調べてみよう。

○海上交通と陸上交通との長所・短所を比べてみよう。

(3) 海上交通事業の経営

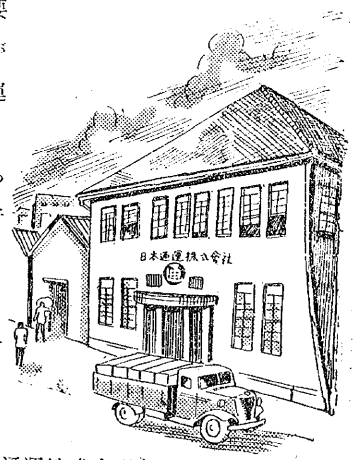
海上交通事業の経営に当たるものは，民間の会社であるが，これには政府が補助を行うことが多い。汽船会社は，自分の所有する船だけでなく，よそから船を借りうけて事業を経営することもある。わが國の汽船会社は，戰時中その大部分の船を政府に徵用され，しかもそれがほとんど沈没したり，破壞されたりしてしまったので，現在ではごく少数の船しか持っていない。したがって，このごく少数の船を最も有効に働かすために，船舶運営公團がもうけられ，すべての海上交通を統制している。

○わが國今後の船舶行政はどうあればよいかを考えてみよう。

○河川・運河の交通についても研究しよう。

3. 小運送

貨物を運送するには，鉄道や船だけでは十分に行われない。たとえば，鉄道はレールの通じているところまでは，貨物を運ぶことができるが，そうでないところには，ほかのものを使って貨物を運ばなくてはならない。このことは，港で沖にてい泊する船と，波止場との間でも同様である。このように，鉄道や船がきかない間の運送を連絡することは，貨物の運送をなめらかに完全に行うためぜひ必要である。この仕事をするのが小運送である。それ故，小運送は，陸上では貨物自動車・牛車・馬車・荷車などを使って，駅との往き來の運送を行い，また，海上では はしけを使って船と船との間，あるいは船と波止場との間を連絡するのである。



このうち陸上の小運送は，各駅の近くにある丸通（日本通運株式会社）がおもに，この仕事を取り扱っている。なお，丸通では荷造りや運送の手配などもしているから便利である。また，海上の小運送は回そう問屋が扱うが，ここでは船に貨物を積みこんだり，船から貨物を陸上げしたりする場合の仕事や，その手続きをもしてくれる。

○郷土に便利屋のようなものはないか，また，それがどういうしくみかを調べてみよう。

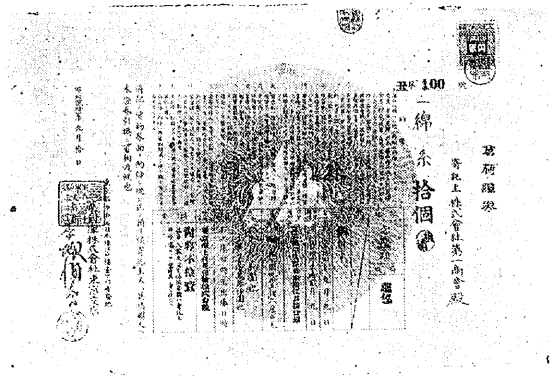
○小運送は配給とどんな関係を持っているかを考えてみよう。

○小運送が託送者の氣に入るためには，どうあればよいかを考えてみよう。

4. 倉　庫

運送の途中では，鉄道や船のつごうで，貨物をしまっておく必要が起ることが多い。また，配給の際にも一時商品をしまっておくことがある。こうした場合に必要なものは倉庫である。

このような場合に備えて，運送業者はもちろん商人も，たいてい倉庫を持っているが，品物が多かったり，あるいは，品物の種類によってそれをしまっておくのに，特別な設備が必要で



あったりする場合には，料金（保管料または倉敷料）を拂って他の倉庫を借りることができる。

倉庫へ品物を預かることを保管というが，保管料をとって品物を預かる倉庫業者は，品物の受取証を預けた人（寄託者）へ渡す。特に必要な場合には，倉荷証券を作って渡すことがある。この証券は，寄託者が預けた品物を保管されているままで，他へ賣り渡す場合などに利用される。

倉庫は，駅や港の附近など交通の便利がよい場所に，火災や

盜難を予防し，濕氣や ねずみ などの害をうけないよう，安全かつ丈夫に作ることが必要である。また品物の出し入れに便利なよう，起重機・昇降機などを備えつけることもある。次に，保管する品物の種類によって，特別な設備をした倉庫には，農家が供出した米や麦を保管する農業倉庫，繭を保管する乾繭倉庫，魚や肉・卵・果物などの，腐りやすい品物を保管する冷藏倉庫などがある。

○倉庫は配給とどんな関係があるかを調べてみよう。

○倉庫にはその構造と機能からみて，どんな種類があるかを調べてみよう。

いろいろの通信

○通信がとだえた場合に，われらの生活はどうなるかを考えてみよう。

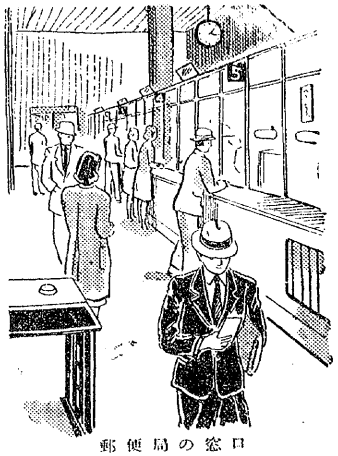
われわれが多くの人と共に暮らして行く間には，いろいろのことを，他の人に知らせる必要のあることが少なくない。相手の人が近所にいる場合には，直接会って話すこともできるが，遠方の人には手紙を出して傳えなければならない。急ぐ場合には電話をかけたり，電報を打ったりする。

○通信制度の発達した経路を調べてみよう。

人と人とが用件を知らせあう通信ということは，交通と共に昔から行われて來たが，現在では，その方法が非常に発達して來ている。通信の方法が発達すると，人がおたがいに，いろいろな出來事を知らせあうから，知識がひろまり，またさまざまな出來事がはやく世の中の人々にわかり，用をたすにも非常に能率があがるようになる。したがって，われわれの暮らしに便利なばかりでなく，生産や配給の働きを十分に，かつ能率よく行うためにも，とてもつごうがよい。さらに，文化を向上させよい政治を行うにも，世界中の人々が一つになって暮らして行くためにも，通信の方法が発達していることはすこぶる便利である。このように，通信は交通と共に，非常にたいせつな働きをつとめるのである。次に通信について調べてみよう。

○通信機械の発達は世界を一家とするというが，どういうことかを調べてみよう。

1. 郵便


郵便局の窓口

通信の方法として，今日一番多く利用されているのは郵便である。郵便は，またどこの國でも政府がみずからその事業を営み，「信書の秘密」ということを守っている。郵便の制度は料金が均一であること，料金は前拂いをすること及び切手を使うことなどがその特徴である。こうした方法は，イギリス人ローランド・ヒルに負うところが大であるといわれている。

○わが國の郵便制度の発達を調べてみよう。

また，郵便は國内ばかりでなく，万國郵便同盟によって，全世界どこにでも出すことができるようになっているが，これを國際郵便（または外國郵便）といっている。

(1) 普通の郵便（通常郵便）

郵便局で取り扱う普通の郵便には次の種類がある。

1. 封書(第一種) 普通の手紙は封をするが，印刷物などは開き封として出すと料金が安い。

○封書の料金は何グラムいくらかを調べてみよう。

○開き封として出せるものにはどんなものがあるか，また，その料金はいくらかを調べてみよう。

2. 葉書(第二種) 普通は官製であるが，私製はがきの利用も許される。また，葉書には往復はがき・封かんはがきがあるが，これには私製は許されない。

○各種はがきの料金はいくらかを調べてみよう。

○はがきの大きさはきまっているが，それはどれくらいかを調べてみよう。

○葉書の表面に通信文を書いてもよいかどうかを調べてみよう。

○書き損じたはがきをむだにしないよう工夫してみよう。

3. 帯封(第三種) 新聞や雑誌などを送るには，帯封にして送ることができる。

○どんなものを帯封にして送ることができるかを調べてみよう。

○またその料金はいくらかを調べてみよう。

このほか写眞や絵などを送る場合（第四種）や，農産物の種子を送る場合（第五種）はそれぞれ取り扱いが違っている。

○第四種郵便にはどんなものがあるか。また，その料金はどうなっているかを調べてみよう。

○第五種の料金を調べてみよう。

(2) 特別の郵便 （特殊郵便）

郵便には通常郵便のほかに，次のような特別な出し方がある。

1. たいせつなものを封筒に入れて出す場合には，書留と價格表記の方法がある。おかねをそのまま封筒に入れて送る場合には，必ず價格表記としなくてはならない。

○書留とはどんな方法か，また，その料金はいくらかを調べてみよう。

○價格表記とはどんな方法か，また，料金はどうなっているかを調べてみよう。

2. 相手に早く着くようにしたい時には速達を利用する。

○速達の料金はいくらかを調べてみよう。

○速達は全國どこへでも出すことができるかどうかを調べてみよう。

○先方にたしかに傳えたい時には内容証明を利用する。

○特殊郵便にはどんなものがあるか調べてみよう。

なお，現在わが國にはいろいろな制限があるが，外國郵便も一部行われている。

○外國郵便について，その制限や料金などを調べてみよう。

(3) 手紙を出す時の注意

まず，ていねいに，かつ，きれいに書くこと，特に目上の人に出す場合はそうである。次に，あて名や自分の住所・姓名をはっきりわかるように書くこと，また，たいせつな用件を書いたものは，その控えをとっておかなくてはならない。特に，商売のための手紙は必ず控えを作っておき，また，取引先から來た手紙は保存・整理しておき，いずれも，後日の証拠として，少なくとも一年間はとっておかなくてはならない。

○郵便配達の能率をあげるには，どんな工夫が必要かを考えてみよう。

○郵便局には私書ばこというものがあるが，どんなものかを

調べてみよう。

○郵便局に行って事務処理の実際を見学しよう。なお，当事者から，手紙が着くまでの経路について話を聞こう。

○なつ印器について説明を聞き，さらに能率のよいものを工夫するようにつとめよう。

2. 小包郵便

目方の軽い品物や，あまりかさばらない品物は，郵便局で小包郵便として取り扱っている。小包郵便は，頒む手数が簡単であり，また，あて名のところまで配達してくれるから便利である。なお，小包郵便にも特別な取り扱いがある。

○小包郵便の重量及び容積には，どんな制限があるか調べてみよう。

○普通小包の料金を調べよう。

○特殊小包にはどんな取り扱いがあるか，また，その料金はどうなっているかを調べてみよう。

○小包を出す時にはどんな注意が必要かを考えてみよう。

○印鑑はどうして送ったらよいかを調べてみよう。

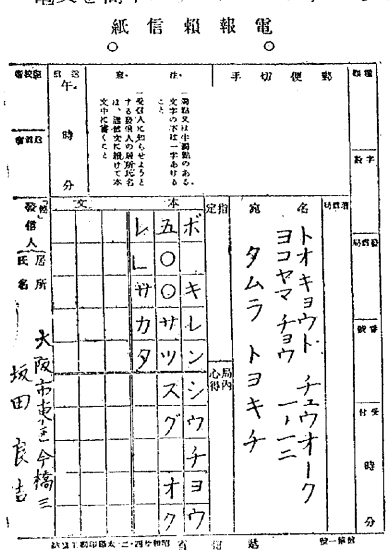
3. 電 信

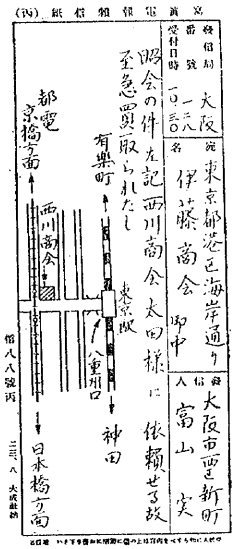
急な用ができ，郵便も間に合わず，電話もきかない時には電報を利用する。

電報は，郵便に比べると料金が高いから電文はなるべく簡単で，しかも意味がはっきりわかるように書くことがたいせつで

あり，これは郵便の能率をあげるためにも必要なことである。また，電文は片かなで書くのであるから，まちがいやすい字や，電報を受け取った人が，その意味をとり違えないように注意して書くことがたいせつである。

電文を簡単にするためには，略号や暗号が使われることが多





い。ことに暗号を利用すると料金が安くなるばかりでなく，秘密を保つためにもつごうがよい。

○電文を簡単・明りょうにするためには，どんな工夫をしたらよいかを考えてみよう。

○敬語はどう取り扱ったらよいかを考えてみよう。

なお，電報にも種々の特別な取り扱いがある。

○ 普通電報の料金を調べてみよう。

○ 各種特別取り扱いと，その略号及び料金を調べてみよう。

○ まちがいやすい片かなはどれかを研究しよう。

○ 略号や暗号で知っているものがあれば整理してみよう。

○ 列車や船の乗客に電報を出すには，どうしたらよいかを調べてみよう。

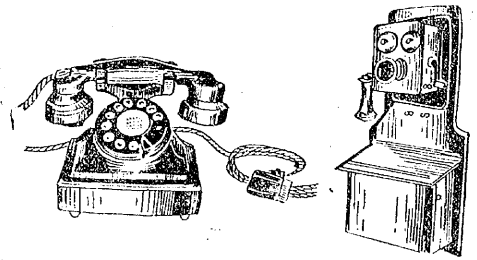
○ 電報頼信紙の記入方法を練習しよう。

○ 電文を簡約にする仕方を研究してみよう。

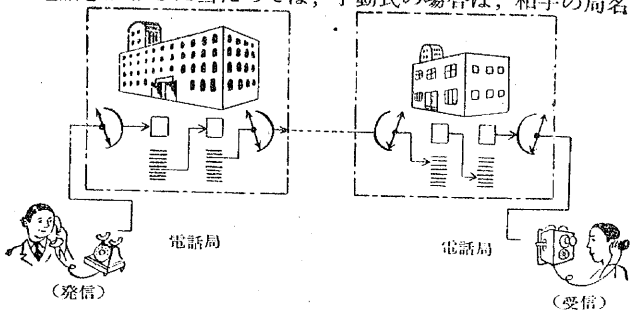
4. 電　話

電話は，ちょうど相手の人と直接会っている時と同じように，話ができるので，通信方法としては一番すぐれている。

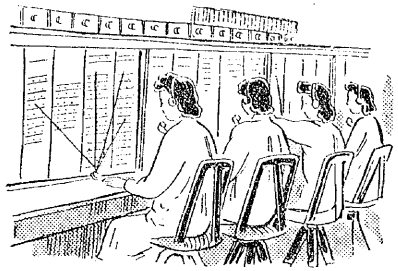
電話をかけるのに，自分の家にない時には，よその家や郵便局で借りたり，あるいは，公衆電話を利用する。その際，電話機にはいろいろの型があることに氣がつくであろう。たとえば，壁にかけてあるものや，机の上においてあるものがあり，その型もさまざまである。なお，電話機には交換局をよび出し，相手の局名・番号を言ってつないでもらう手動式のものと，文字盤をまわして自動式に相手にかけるものとがある。



電話をかけるに当たっては，手動式の場合は，相手の局名・番号をはっきりいうこと，ことば使いに注意して礼を失しないようにすること，話はなるべく簡單にすませること，また，先方が受話機をかけてからこちらがおくなどの注意が必要である。反対に，電話がかかって來たら，まず，さきにこちらの名まえをいうこと，たいせつな用件はその控えをとっておくことなどに注意しなくてはならない。



自働式電話交換の原理



手働式電話交換

なお，電話の料金は通話の回数によって計算する場合と，一年いくらときまった定額の料金である場合とがある。市外など長距離の地にかける時には，それだけ料金が高くなる。

○ 有線電話・無線電話について研究しよう。

○ 電話機の種類や型を調べて，その特徴を考えてみよう。

○ 自動式電話機を使うには，どんな注意が必要か考えてみよう。

○ 電話の料金を調べてみよう。

○ 電話を設けるには，どんな手続きをしたらよいかを調べてみよう。

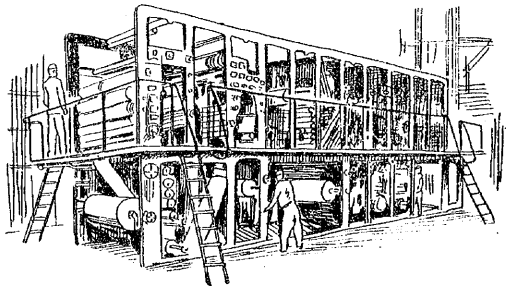
○ 航海中の船客に電話をかけられるかどうかを調べてみよう。

○ テレビジョンについて調べてみよう。

5. 新聞とラジオ

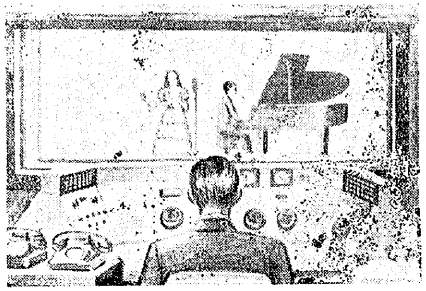
世の中のいろいろの出來事を，廣く世間の人々に知らせる通信の方法としては，新聞とラジオがある。

新聞は毎日の出來事について，それを正しく早く世の中に報道すると共に，また，將來の出來事を予報し，多くの世間の出



來事を批評したり，あるいは，それについて世間の人の意見を尋ねて，それを発表したりする。われわれが多くの人と共に，いっしょに暮らして行くためには，新聞によって世の中の出來事や人々の考えを知ることがたいせつである。特に，経済や商業について正しい知識を持つことと，世の中の動きを知ることは，商業そのほかの経済活動をする人々には絶対に必要である。このため，こうした人々の読む特別の新聞さえ発行されている。

ラジオもまた，通信・報道の機関として，新聞と共にたいせつな働きをするが，ラジオは新聞よりも早く，その日の出來事を知らせる点ですぐれており，また，ラジオは娯樂のためにも非常に利用されている。



○ われわれの生活と通信との関係を調べてみよう。

○ 新聞とラジオとの長所と短所とを比べてみよう。

○ 以上のほか，通信の方法にはどんなものがあるかを調べてみよう。

○ 通信の方法がどんなふうに発達して來たか，その歴史を調べてみよう。

○ わが國のおもな新聞について，その本社の所在地及び発行部数を調べてみよう。

○新聞はどんなしくみをもって発行されているか，また，言論機関として，どんな價値を持っているかを調べてみよう。

○ラジオは大衆娯樂としてどんな價値を持っているか，またどれくらい普及しているかを調べてみよう。

いろいろの統計

生計費

（経済安定本部発表）

標準生計費			食費の占める割合		
				配給	非配給
昭和20年2月	平均4.58人	1,624.90円	60.1%	(4.9%)	(77.11%)
〃 3〃	〃 4.67〃	1,149.84〃	53.2〃	(19.7〃)	(73.8 〃)
〃 4〃	〃 4.46〃	1,229.34〃	59.1〃	(18.6〃)	(76.4 〃)
〃 5〃	〃 4.48〃	1,556.61〃	65.1〃	(13.6〃)	(83.2 〃)
〃 6〃	〃 4.46〃	1,684.59〃	67.2〃	(12.1〃)	(84.1 〃)

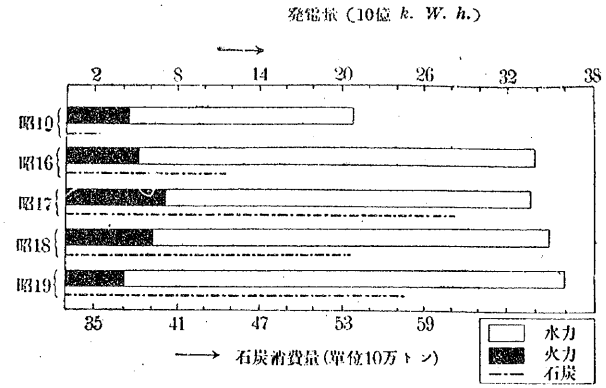
生産指数

（経済安定本部作成）

昭和 21 年 1 月	100.0	昭和 21 年 5 月	230.0
〃 2 〃	126.0	〃 6 〃	240.7
〃 3 〃	156.0	〃 7 〃	275.2
〃 4 〃	185.4	〃 8 〃	307.7

電力需要量（単位千キロワット）

年 / 月 / 用途別	20 12	21 3	21 6
電燈・電熱	459,235	513,175	450,361
鉱業	120,844	135,948	136,830
金属工業	79,680	129,212	170,803
機械工業	40,143	54,652	64,001
化学工業	166,066	250,243	381,932
窯業	10,866	10,988	15,355
電氣鉄道	64,547	69,316	77,501
紡績	15,104	22,956	26,212
公共事業	22,105	25,369	31,043
契約500キロ未満	198,733	251,894	356,597
その他	537,441	726,329	940,937
計	1,714,764	2,190,082	2,651,577



石炭消費量（単位千トン）

産業別	昭10年度	昭16年度	昭19年度	昭20年度上期
製鉄・製鋼	5,259	13,171	11,242	2,765
ガス・コークス	2,214	4,080	3,357	747
電力	2,876	4,207	3,705	633
造船・造機・金属	528	2,024	2,740	708
窯業	3,686	3,779	2,029	598
化学工業	2,506	6,572	4,600	1,214
繊維工業	5,449	4,926	1,026	355
食料品工業	1,370	1,527	684	268
製塩業	753	355	331	169
鉱山	517	952	608	201
液体燃料	—	603	1,573	606
れん炭・豆炭	1,288	1,780	439	106
鉄道	3,722	5,105	8,097	3,430
温・熱・浴その他	4,136	4,183	2,616	1,451
官廳用	159	505	497	202
軍用	726	3,325	2,848	852
船舶燃料	4,498	2,931	1,047	281
山元消費	3,020	2,915	3,000	1,406
総計	42,707	62,940	50,434	15,992

鉄道路線延キロ数

年度末			國有鉄道	私有鉄道	計
明治		5	28.96	—	28.96
	1	5	184.69	—	184.69
	2	5	885.94	2,124.45	3,010.39
	3	5	1,709.50	4,844.29	6,553.79
大正		1	8,394.48	1,282.61	9,677.09
	1	3	12,161.71	4,595.10	16,756.81
昭和		1	12,884.65	5,370.40	18,255.05
		5	14,487.33	7,018.14	21,505.47
	1	0	17,030.37	7,097.56	24,127.93
	1	5	18,287.80	9,909.62	28,197.42
	2	1	32,155.00	7,819.00	39,974.00

國民産業配分表

業種別	合計		昭和5年の百分比	男子	女子
	総数	百分比			
工業	4,834,317	22.3	19.8	3,839,515	944,802
鉱山業	458,441	2.0	1.1	386,698	71,743
農林業	12,158,594	53.5	47.7	6,621,299	5,537,295
水産業	446,976	2.0	1.9	404,208	42,768
商業	1,260,146	5.6	16.6	896,482	363,664
交通業	1,317,737	5.8	3.2	1,081,728	236,009
自由業	791,174	3.5	6.8	518,372	272,802
公務・教育	1,093,460	4.8		762,348	331,112
家事業	147,350	0.7	2.7	19,133	128,217
その他の産業	179,403	0.8	0.2	152,223	27,180
有業者総数	22,687,598	100.0 / 80.8	100.0 / —	14,732,006	7,955,592
無業者総数	3,336,750	11.8	—	1,781,884	1,554,866
学生生徒	2,105,926	7.4	—	1,113,731	992,195
合計	28,130,274	—	—	17,627,621	10,502,653

本表は昭和20年12月1日に実施した臨時國民登錄の結果により作成した。

主要物資生産高　（商工省発表）

年次＼品目	石炭	電力		銑鉄	硫安
単位	千トン	百万 k. W. h.		トン	トン
		火力	水力		
昭和1年(1926)	∨ 31,426	不詳	不詳	∨ 809,624	30,391
〃 2年	∨ 33,520	〃	〃	896,171	90,119
〃 3年	∨ 33,560	1,187	10,771	∨ 1,092,536	126,933
〃 4年	∨ 34,257	1,750	11,562	∨ 1,087,128	140,705
〃 5年(1930)	∨ 31,376	1,459	12,511	∨ 1,161,894	116,543
〃 6年	∨ 27,987	1,538	13,239	∨ 917,342	271,543
〃 7年	∨ 28,053	1,776	14,651	∨ 1,010,761	355,207
〃 8年	∨ 32,523	2,996	15,414	∨ 1,436,682	380,298
〃 9年	35,924	3,317	17,156	∨ 1,728,158	407,555
〃 10年(1935)	∨ 37,762	4.258	18,506	∨ 1,906,787	560,137
〃 11年	∨ 41,803	4.248	20,762	∨ 2,007,571	783,890
〃 12年	∨ 45,258	5,320	21,859	∨ 2,308,451	834,833
〃 13年	∨ 48,684	6,371	22,976	∨ 2,653,043	1,018,607
〃 14年	∨ 52,409	7,198	22,658	3,178,602	1,016,048
〃 15年(1940)	57,318	6,599	24,911	3,511,940	1,142,491
〃 16年	55,602	5,171	28,798	4,172,710	1,229,018
〃 17年	54,179	7,149	26,473	4,256,348	1,068,016
〃 18年	55,539	6,194	28,642	3,803,746	929,571
〃 19年	49,335	4,100	29,000	2,564,072	610,604
〃 20年(1945)	22,334	540	19,520	468,994	344,670
備考	∨印は暦年を示す。	昭和3年及び昭和4年の電氣年度（前年の12月よりその年の11月まで）を示す。	(1)同　左 (2)電氣事業用のみにして自家用を含まず。	(1)∨印は暦年を示す。 (2)再生銑・盟外銑を含む。	副産硫安を含む。

引受通常郵便物数累年比較　（逓信省発表）

年次	総計	書留	價格表記	その他
昭和7年(1932)	4,253,759,031	58,085,809	2,530,284	4,193,142,938
〃 8年	4,357,325,609	60,543,739	2,649,711	4,294,132,150
〃 9年	4,674,986,977	63,319,389	2,790,737	4,608,876,851
〃 10年	4,735,528,007	65,752,687	2,915,394	4,666,859,926
〃 11年	4,787,567,057	69,497,264	3,064,477	4,715,005,316
〃 12年(1937)	4,763,778,174	71,209,926	3,283,742	4,689,284,506
〃 13年	4,315,098,460	78,481,193	3,623,778	4,232,993,429
〃 14年	4,585,883,852	89,070,058	4,094,133	4,492,719,661
〃 15年	4,484,938,026	98,288,253	4,428,801	4,382,220,972
〃 16年(1941)	4,486,996,258	105,356,257	4,496,671	4,377,143,330

引受小包郵便物数累年比較

年次	総計	有料				無料
		書留	價格表記		その他	
			通貨	物品		
昭和7年(1932)	58,472,313	20,840,081	88	2,159	34,991,812	2,638,173
〃 8年	61,240,342	21,340,781	69	1,990	37,177,858	2,719,644
〃 9年	65,078,429	21,952,153	73	2,135	40,311,122	2,807,946
〃 10年	68,291,938	22,494,397	39	2,662	42,564,111	3,230,729
〃 11年	71,588,039	22,955,804	67	3,207	45,053,382	3,575,579
〃 12年	80,529,155	28,074,735	137	3,573	48,712,840	3,737,870
〃 13年(1938)	90,459,389	34,558,148	427	4,438	52,061,978	3,834,398
〃 14年	101,241,070	40,678,830	538	5,241	56,817,520	3,738,941
〃 15年	102,751,485	41,405,939	365	4,532	57,733,377	3,607,272
〃 16年(1941)	103,513,968	41,417,230	290	1,402	58,549,422	3,545,624

中学商業

昭和 22 年 9 月 8 日 飜刻発行
昭和 30 年 1 月 20 日 印刷
昭和 30 年 1 月 25 日 発行
〔昭和 30 年 1 月 25 日 文部省検査済〕

中商 700

著作者 文部省

東京都文京区白山御殿町10番地
発行者 國民図書刊行会
代表者 大橋貞雄

東京都文京区久堅町108番地
印刷者 共同印刷株式会社
代表者 大橋芳雄

東京都文京区白山御殿町10番地
発行所 株式会社 國民図書刊行会

¥ 40.00